

『賀茂保憲女集』研究

—『枕草子』の表現との重なりを中心に—

A Study On “Kamo Yasunori no Musume Shu”

—Focusing On An Overlap With An Expression Of “The Pillow Book”—

糸賀 園華

Sonoka Itoga

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 言語文化学専攻 日本文学専修

キーワード：中古文学，和歌，賀茂保憲女集，枕草子

Key words : Mid-ancient Literature, Poetry, Kamo Yasunori no Musume Shu, The Pillow Book

1. 目的

『賀茂保憲女集』（以下『賀茂女集』とする）の特異性を平安時代中期までの和歌や物語などの作品、この時代に読まれていたであろう漢詩作品を比較して、明らかにすることが目的である。

研究対象の『賀茂女集』とは、正暦四（993）年頃または長徳四（998）年の疱瘡流行時に罹病し、その後まもなく没したと考えられている賀茂保憲女が、晩年に編纂したと考えられる私家集である。

伝本の代表的なものは、二系統三類に分類される。本研究では、宮内庁書陵部蔵の一系統一類（流布本系 一五二・二三八）を底本とし、二系統一類（異本系 五〇一・一七七）で補い漢字をあてた『和歌文学大系 賀茂保憲女集』[1]を引用した。

歌集の特徴の一つに八千字に及ぶ長大な序文がある。流布本の和歌は、二〇九首の短歌と一首の長歌からなり、部立は春、夏、秋、冬、恋、雑である。恋は、逢ざる恋、逢ての恋、逢てあはぬ恋と三つに区分されていることが特徴である。

歌集の問題は、流布本と異本で和歌の数も部立も異なり、写本の字が読めずに翻字されていない部分がある。歌意の不明瞭なものも多いとされ、他の歌には使われていない語を詠み、語彙の意味が分からないものもあるところである。

その中『万葉集』や『土佐日記』、『蜻蛉日記』からの影響が指摘され、初期百首の流れにあり、『源氏物語』や相模などの百首歌に影響を与えたとの研究がされている。また、陰陽道の曆的観念や神事的感覚、仏教的な面がみられるといわれる。

以上のように『賀茂女集』の研究は和歌だけではなく、物語、日記などの解釈につながる可能性がある。『賀茂女集』の特異性を明らかにすることが、平安時代の他作品の解釈、和歌史における研究の発展として意義がある。

2. 方法と各章の結果

本研究は、平安時代中期までの和歌集と主な漢詩作品、物語や日記といった和歌集以外からの考察を行った。そして『枕草子』[2]を中心として表現の重なる「やなぎのまゆ」「はなごころ」「あま」を取り上げ、『賀茂女集』[1]のこれらの語の意味や序文・和歌の解釈から特異性を考察した。

第一章「やなぎのまゆ」についての考察。

平安時代中期までの主な漢詩作品[3]での「柳眉（りゅうび）」の意味は、「眉のような柳」「柳のような眉」である。平安時代中期までの和歌[4]での「やなぎのまゆ」の意味は、「柳のような繭」「柳のような繭と柳のような眉」「繭そのもの」である。この漢詩、和歌での検証を踏まえ、『賀茂女集』[1]冒頭序文、四季歌の序の春にある「柳の眉広げたり」と『枕草子』[2]第二八二段「三月ばかり物忌しにとて」の和歌「さかしらに柳のまゆのひろごりて春のおもてを伏する宿かな」の考察を行った。両作品では「繭」の意味はなく、漢詩にある「ひろげる」が共通し、春の柳の様子を描く。「やなぎのまゆ」を漢詩以来の「展」や「開」と使用している。また『賀茂女集』「かほ鳥」、『枕草子』

「おもて」といった近しい表現がみられ、両作品の影響関係を指摘した。

第二章「はなごころ」についての考察。

平安時代中期までの主な漢詩作品[3]での「花心(かしん)」の意味は、「花の蕊(しべ)」「花そのもの」である。平安時代中期までの和歌と詞書[4]での「はなごころ」の意味は、「うつろいやすい浮気な心」である。この漢詩、和歌での検証を踏まえ、『賀茂女集』[1]春の部二番歌「春霞たなひきわたる今日よりやなへて草木も花心(はなごころ)付く」と『枕草子』[2]第二六〇段「関白殿、二月二十一日に、法興院の」の「花の心ひらけざるや」の考察を行った。両作品は漢詩の意味だけでも和歌の意味だけでも理解しにくく、漢詩、和歌の意味を融合したものだといえる。この意味用法から両作品の影響関係を指摘した。

第三章「あま」についての考察。

『賀茂女集』恋の部、逢ざる恋の一四三番歌「君をのみこひつるあまの玉の緒はさをにかゝれる命なりけり」と『枕草子』第二八六段「うちとくまじきもの」を考察した。平安時代中期までの和歌や詞書[4]の検証から「さを(棹)」が「さす」ものではなく「かかる」としたものは『賀茂女集』が初期である。また「命」と共に多く詠まれる「たくなは(海女が潜る時に腰につける命綱の意)」ではなく「たまのを(玉の緒)」の選択は稀であった。

『賀茂女集』「玉の緒(命の意)」は『枕草子』にある「腰につきたる緒」「放ちたる息」(＝息の緒：命の意)と「命」と関わる語で影響関係を指摘した。「あま」の漁は、和歌集以外の作品[5]でも見られる。平安時代中期では『うつほ物語』と『枕草子』にあるが、『枕草子』の「あま」の描写の細かさは他に見られず、『賀茂女集』の「のみ(鑿：漁で腰につける籠の意)」「こひ(鯉)」「つる(釣る)」「あま」「棹」と「あま」の漁にかかわる語の多さからも影響関係を指摘した。

3. 結論

第一章は「やなぎのまゆ」に漢詩「柳眉」以来の表現が用いられていること、第二章は漢詩「花心」と和歌「はなごころ」の融合的意味で解釈すること、第三章は「さを」に「かかる」とした初期の例であること、また「あま」「玉の緒」の組み合わせが稀であることが指摘でき、これらが特異といわれる特徴の一部と考える。第一章から第三

章を通して、平安時代中期までの主な物語や日記作品よりも『賀茂女集』『枕草子』両作品にだけ見える共通点が指摘できる。

『賀茂女集』の特異性は、漢詩、古典の知識や教養があり、伝統やこの時代の流行に即していた。その一方で、知識や教養を活かし、新たな語や意味、詠み方と自分なりの表現方法を模索していたところである。

『枕草子』との表現の重なりから、平安時代中期において、『賀茂女集』と『枕草子』は、どちらかがどちらかの作品を目にし、影響関係があった可能性がある。もしくは、作品を目にしなくとも平安時代中期という時代において、知識や教養を活かし、古典を重んじつつ、自分なりの表現を模索した点で二人の共通性が見いだせる。

4. 今後の課題

本研究では、『賀茂女集』の三語にのみ着目して論じたが、歌集全体の詳細な検証、平安時代中期以降との関わりが今後の課題である。

主要参考文献

- [1] 武田早苗・佐藤雅代・中周子『和歌文学大系 20 賀茂保憲女集/赤染衛門集/清少納言集/紫式部集/藤三位集』(武田早苗『賀茂保憲女集』) 2000・3 明治書院
- [2] 松尾聡・永井和子『新編日本古典文学全集 18 枕草子』1997・11 小学館
- [3] 『凌雲集』『文華秀麗集』『経国集』『扶桑集』『本朝麗藻』『中右記部類紙背漢詩集』『本朝無題詩』『鳩嶺集』『和漢兼作集』『性靈集』『都氏文集』『田氏家集』『菅家文草』『菅家後集』『江吏部集』『新撰朗詠集』『本朝文粹』『本朝続文粹』『紀長谷雄漢詩文集』『懐風藻』『翰林学士集』『新撰類林抄』『法性寺関白御集』
- [4] 『新編国歌大観』CD-ROM (角川書店) 検索
- [5] ジャパンナレッジ Lib 検索
<http://japanknowledge.com/library/>
『古事記』『日本書紀』『風土記』『日本霊異記』『竹取物語』『伊勢物語』『大和物語』『平中物語』『土佐日記』『蜻蛉日記』『うつほ物語』

平安文学と蔵人所

— 『枕草子』を中心に—

Heian literature and Kurodo-dokoro
—Focusing on the "Makura no soshi" (The Pillow Book) —

峰岸 里衣
Satoi Minegishi

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 言語文化学専攻 日本文学専修

キーワード：蔵人，蔵人頭，蔵人所，『枕草子』

Key words : Kurodo, Krodo-no-to, Kurodo-docoro, "Makura no soshi" (The Pillow Book)

1. 研究の目的と方法

平安時代の蔵人所について、王朝文学に登場する蔵人を歴史的事実と照合・比較しながら考察した。本研究では、蔵人所の職掌と特徴を把握し、清少納言とどのような関係性を持ちえたのかを蔵人の人物像を追いながら考察しようとした。

そのための手立てとして、主に一条朝の蔵人の実態を捉え、『枕草子』内の記述と比較し検討した。特に、『枕草子』に描かれる蔵人を整理して用例を比較し、蔵人頭・五位蔵人・六位蔵人など職位ごとの特徴を抽出した。蔵人登場章段については先行研究の再検討を行った。

蔵人所に関する歴史的な研究、及び、『枕草子』における清少納言と男性貴族との交友について再考し、新たに『枕草子』を蔵人所に視点をおいた読み直しを試みた。

2. 『枕草子』と蔵人たち

まず、有職故実書に示される蔵人所の職掌と特色について確認した。（「第一章 蔵人所の役割」）

蔵人所とは、平安時代初期の官制改革で設置された令外の官である。王朝文化の中で、天皇の傍近くに仕えて殿上を管掌する重職である蔵人頭を中心に、五位蔵人・六位蔵人・非蔵人・雑色・所衆を主だった職員としていた。

『枕草子』には蔵人に関する記述が多くあり、明らかに蔵人が登場している章段は四二章段ある。（第二章 『枕草子』の蔵人たち）特に六位蔵人を賛美する内容と蔵人頭と会話する内容が目を

引くが、蔵人その職自体についても語っており、清少納言が蔵人所という場所、蔵人という職に強い興味を向けていたことは明らかである。ここでは、『枕草子』に登場する男性官僚を列举し、整理した。蔵人または蔵人頭経験者が半数以上を占め、蔵人経験の無い人物は総数の一割であった。清少納言と蔵人との関わりを指摘するとともに、平安中期における蔵人所の政治的な重要性を示すものとして再確認した。

次に、登場回数の多い六位蔵人と蔵人の五位、五位蔵人について、賛美・行事・近侍等その章段における役割ごとに用例を比較し、分析した。注釈書の差異や先行研究での論点に触れて検討し、本研究での解釈をうち出した。（「第三章 六位蔵人・雑色たち」「第四章 五位蔵人たち」）

「第五章 『枕草子』の蔵人事情」では、前章までの内容を受け、蔵人所が『枕草子』にどのように関わってきたのかを論じ、その意義を考えた。

3. 『枕草子』と蔵人頭

蔵人所の蔵人たちに向ける清少納言の目線や行動を言及した上で、会話や文のやりとりなどの応酬がある蔵人頭の場合について言及した。蔵人所の長官である蔵人頭は、『貫首秘抄』に「天下巨細弁官頭所執奏也 禁中万事 次将頭所申行也」と記されるように、頭中将は天皇への側近的な奉仕、頭弁は太政官と天皇との取り次ぎ役としての実務処理に重きが置かれる要職であった。『枕草子』に「頭中将」「頭弁」として登場する蔵人頭は、それ

ぞれ藤原斉信と藤原行成である。当時の蔵人頭に該当する人物は七名居るはずだが、斉信と行成の場合以外はその後の官職による記述がなされている。斉信と行成との交流の特徴とその異同について論じた。（第六章 頭弁・藤原行成と清少納言）「第七章 頭中将・藤原斉信と清少納言」

両者とも漢詩文の教養に関する交渉を残しており、趣を解する有能さや周辺の殿上人に与える影響力にさほど差は無いものと考えられる。ただし、朗詠の声の素晴らしさや立ち姿の美しさなど生まれ持った魅力について叙述されるのは圧倒的に斉信の方であり、まさしく宮中の花形である頭中将にふさわしい描き方である。行成もまた「五月ばかり」で「頭の弁もろともに 同じことを返す返す誦じたまひて」と朗詠する場面があるが、強調されているのは清少納言の返事に呼応した機転と公達を先導する代表的立ち位置であり、個人の持つ能力や容貌を称える描写は無い。

斉信と行成との交渉に見られるそれぞれの特色について、先行研究を参照・批判し、五位以下の蔵人たちとの違いに着目しながら論じた。

4. 結論

『枕草子』には多くの蔵人が登場するが、蔵人所の蔵人たちは職位によって清少納言との叙述に差異が見られる。六位蔵人や蔵人頭といった官職の記号にはそれぞれ意味づけがなされており、清少納言の蔵人観が見て取れる。兼官によって衣装や呼び名の変化する場合があるが、清少納言は人物を認識するにあたって必ずしも正確に相手の職を把握していたとは言えない。清少納言の判断基準の第一には蔵人であるか否かという点が置かれていたのではないかと考えられる。蔵人所という組織を描写することは無かったが、蔵人所の職員に関して雑色や所の衆といった末端まで目に留め、評価対象としていた。

『枕草子』の中で蔵人は、天皇の傍近く仕える役割とその内裏での華々しさを持つ存在として度々登場するが、彼らを賛美し時に批判し自分自身が交渉をもつことによって清少納言は后側の女房を対の存在として印象づける。複数の章段に渡り蔵人と女房との関わりを描くことで、権威をめぐる男女の駆け引きの様相をも表している。蔵人頭との交渉に見られる親しさは、個人の感情以上に、内裏での役割を引き立たせる装置であった。

5. 研究の意義と今後の課題

蔵人所に関する歴史的な研究と、『枕草子』研究でなされてきた文学的な研究とを組み合わせることで、検討することで新たな見方を提案した。また、清少納言の叙述する蔵人について職位別に確認し、それぞれの蔵人が登場する意義を考察できた。

今回は『枕草子』の蔵人たちについてのみ扱ったが、他の王朝文学作品についても言及したい。物語との比較、他日記文学との比較を行い傾向性や特徴を明確にした上で、平安文学における蔵人の意義を総合的に考察したい。

また、一条朝以外の蔵人についても整理し、併せて蔵人所と文学とのつながりを考えたい。

主要参考文献

- [1]塩田良平『枕草子評釈』（1955年、学生社）
- [2]池田亀鑑『全講枕草子』（1956年、至文堂）
- [3]下玉利百合子『枕草子周辺論』（1986年、笠間書院）
- [4]森田悌『日本古代官司制度史制度序説』（1967年、現代創造社）
- [5]亀田隆之『日本古代制度史論』（1980年、吉川弘文館）
- [6]菰谷朴『枕草子解環』（1981年、同朋舎出版）
- [7]工藤重矩『平安朝律令社会の文学』（1993年、ペリカン社）
- [8]阿部猛編『増補改訂日本古代官職辞典』（2011年、同成社）
- [9]芳之内圭『日本古代の内裏運営機構』（2013年、塙書房）

テキストは、新編古典文学全集『枕草子』を使用した。『公卿補任』は新訂増補 国史大系（吉川弘文館）を、『検非違使補任』『弁官補任』『近衛府補任』『蔵人補任』は続群書類従完成会出版のものを使用した。

遁世と妻子の関わり

— 『発心集』 『閑居友』 『撰集抄』 を中心として —

Relations of “Tonse” and child and wife

— Around “Hossinju” and “Kankyonotomo” and “Senjusho” —

和田 あや香

Ayaka Wada

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 言語文化学専攻 日本文学専修

キーワード：遁世，仏教説話集，『発心集』，『閑居友』，『撰集抄』

Key words : “Tonse”, Buddhist stories, “Hossinju”, “Kankyonotomo”, “Senjusho”

1. 目的

『発心集』，『閑居友』，『撰集抄』は中世時代の仏教説話集である。多くの遁世にまつわる説話が撰述されている。遁世という語は、『大漢和辞典』等によると「世をのがれる。世をみすてる」とし、概ねそのように定義付けされている。近本謙介^①によれば、遁世や聖の語の概念の多様さを指摘しつつ「世を遁れる隠遁」，「勧進」，「ぬきんでた人」に分類できるといふ。

これらの説話集には、俗世を捨てて仏道を修する者——多くの遁世者が登場する。配偶者を持つ遁世者は、必然的に妻子を捨てなければならない。もちろん、夫を引きとどめる妻子も描かれている。つまり、遁世者を引きとどめる妻子の問題は、これらの遁世者像を捉える上で見過ごすことはできない。

『発心集』，『閑居友』，『撰集抄』に登場する遁世者像を、妻子との別れの描写から再考したい。

2. 「三説話集」について

『発心集』，『閑居友』，『撰集抄』は文学史的にも、作品内容的にも、関連性のあるものだとみなされてきた。

西尾光一は、「説話の随筆化」^②という点でこれらの三説話には文学史的繋がりと指摘した。また、伊東博之^③が指摘したように、「遁世者の実践の指標としての理想的隠者の所行に関する伝承」を中心に収録されたものだとし、作品内容的にも繋がりと理解されてきた。

遁世者像を再考するうえで、これらの「三説話集」を取り上げることは、ひとまず妥当なことだと考えられる。

3. 遁世と妻子の関わり

・『発心集』

遁世者が妻子を捨てていく場面は、7つの説話に描かれていた。『発心集』では、妻子たちの悲しみが描かれ、また捨てていく遁世者自身の悲しみも描かれている。

例えば、巻1第6話の「高野の南に、筑紫上人、出家登山の事」では、「かなしくしける娘の十三ばかりなる者」が泣きながら遁世しようとする父の袖を引っ張る。父は、「いでや、おのれにさまたげらるまじきぞ」と言い、その場で髪を切り落としてしまう。他の例話でも、同話をおさめる『今鏡』と比べても、大量の涙が流されていることが、『発心集』の表現の特徴の一つといえることができる。

そもそも、編者の鴨長明は『発心集』の序文で、凡夫によりそって編んだ仏教説話集であると宣言しており、凡夫であるという姿勢は、妻子との別れ——流される涙や妻子との対立にも現れているものだと考えられる。

・『閑居友』

妻子を捨てる遁世は、3つの説話に描かれているが、『閑居友』では、『発心集』のような「子」を伴う妻は登場しない。

遁世の際にしても、妻に顔を踏みつけられて(上巻14話「常陸国の男、心を発して山に入る事」)

や、妻の顔が髑髏と重なって（上巻 20 話「あやしの男、野原にて屍を見て心発す事」といった話材が見られた。『発心集』のように子を伴った「妻子」として、遁世者を悩ませない。『閑居友』の編者が、幼くして不具の身となり出家したことなどとあわせ、肉体への関心が強かったためといわれる⁴⁾。つまり、遁世する際に悩ませる妻子の姿というのは、『発心集』のような親子の恩愛ではなく、女性としての「妻」の存在だった。

・『撰集抄』

9つの説話に描かれる。『撰集抄』では、妻子との接触をせずに遁世していることが特徴である。

話末評語において、妻子を「ふり捨て」という言葉が使いならされているが、『西行物語』等において語られる、追いつがる娘を蹴落として⁵⁾、といった激しい別れを示してはいない。この「ふり捨て」という語は、広本系の松平本にだけ見られる語ではない。『撰集抄 校本篇』（笠間書院、1979）によれば、広本系統の鈴鹿本、書陵部本、静嘉堂本、略本系統に当たる嵯峨本のいずれにも確認できる。妻子に何も告げずに遁世する行為をさしている。

このように、『撰集抄』において妻子との別れが「ふり捨て」ということばで片づけられてしまうには、次のような理由があると考えられる。

第一に、『撰集抄』は現実的な問題を無視しているということである。杉本圭三郎⁶⁾は、『撰集抄』の説話者の姿勢については「遁世のきびしさを主体的に生きていない」と指摘している。『撰集抄』の遁世者は世俗との徹底的な対立や葛藤をしていないのである。

第二に、『撰集抄』作者は唱導に携わったことがあるかもしれないということ⁷⁾である。話末評語において「妻子ふり捨て」といった言葉が何度も利用されることとも関係があるかもしれない。

『撰集抄』巻9第10話「於長谷寺逢故人」では、西行が元の妻と長谷寺で再会する。『大和物語』「苔の衣」の遍照も、長谷寺で元の妻と再会する。この世での遍照との再会を祈って長谷寺で祈る妻と、西行と「浄土の再会」を祈って勤行する妻。理想的な遁世者像だけではなく、理想的な遁世者の妻像も創作されているのではないだろうか。

4. まとめ

「三説話集」を比較した時に、『発心集』で「子」

への断ちがたい思いが際立っている。同じく鴨長明の手になる『方丈記』でも、養和の飢饉において亡き母の乳房に吸い付く赤子の姿、元暦の大地震で眼球の飛び出した子供を哀しむ武士の姿など、「子」への視線が見られる。『方丈記』の養和の飢饉では、夫婦や親子の恩愛について、「わが身は次にして」相手を思いやる姿が描かれている。『発心集』では、妻子との別れ以外でも、同じような親子の恩愛譚が多く語られているのである。

つまり、『発心集』における遁世者の捨てがたきよすがとは、「わが身は次にして」想う子であり、その子を想う母である「妻」だった。

妻子を捨てた遁世者を讃美する背後には、いかに妻子と離れがたく、遁世の道へ赴くことができず、世俗に繋ぎ止められる現実があるためだった。これまで見てきたように、『発心集』は『閑居友』や『撰集抄』に比べ、泣きながら追いつがる家族としての「妻子」達……一見すると否定的にも見える「遁世の妨げ」をする妻子達を書き漏らすことはしなかった。裏を返せば、『発心集』の遁世者は、それに引きとどめられる心があつたといえる。妻子へ執心がなかったならば、「遁世の妨げ」にはならない。妻子を忌避するはずが、かえって、その恩愛を浮き彫りにする。仏教説話における欲望——「遁世の妨げ」の部分に、その説話集の遁世者像を見出すことができる。そう考えることができるのではないだろうか。

注

- [1]近本謙介「聖と遁世の文学史点描」（『駒澤大学 佛教文学研究』16, 2013.3）
- [2]西尾光一『中世説話文学論』（塙書房、1963）
- [3]伊藤博之「撰集抄における遁世思想」（『仏教文学研究』, 1967.5）
- [4]藤本徳明「愛欲と不浄観—『発心集』と『閑居友』との比較—」（『中世仏教説話論』笠間書院、1977）
- [5]『沙石集』が娘を「縁ヨリ落トシテ」遁世し、『西行物語』（文明本）では「ゑんよりしもへけおとしたりければ」、『西行物語』（阿仏尼本）でも「えんより下へけおとし」とある。
- [6]杉本圭三郎「撰集抄における説話者の姿勢」（『説話文学研究』9, 1974）
- [7]小島孝之「中世説話集の形成」（『中世説話集の形成』若草書房、1999）

『冬物語』における擬似的な死と復活

Pseudo Death and Resurrection in *The Winter's Tale*

岡 里恵

Rie Oka

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 言語文化学専攻 英語文学・英語教育専修

キーワード：シェイクスピア、『冬物語』、ロマンス劇、復活、ハーマイオニ

Key words : Shakespeare, *The Winter's Tale*, romance, resurrection, Hermione

1. 目的

シェイクスピアの後期ロマンス劇に分類される『冬物語』(*The Winter's Tale*, 1611) は、同作家が書いた他のロマンス劇とのあいだに、多くのプロット上の共通点を持っている。しかし、他の劇と異なり、作中の主要人物であるハーマイオニの死と復活の真偽が、最終幕まで他の登場人物のみならず観客にすら明かされない。観客に劇中のすべてを知る特権を許すシェイクスピア作品において、これは異例のことであり、このことからハーマイオニの死と復活の場面は長年議論的となっている。

また、死と復活が重要なキーワードとなるロマンス劇において、「一度死んで生き返る」ヒロインはロマンス劇そのものを象徴する存在であると考えられる。無論、厳密に言えば、「死んだと思われたが実際は生きており、観客を含む多くの登場人物にとっては、生き返ったと思われる」ということになる。つまり、『冬物語』は他のロマンス劇の例に漏れず復活の原因に超自然的な力のはたらきが示唆されながらも、結局は復活の神秘性が否定され、「生きていた」というごく自然な現象にすり替えられていると述べることができる。

これまでの研究で、この超自然的な力のはたらきに代わる解釈が差し出されたことはあっても、なぜ超自然的な力の介入が否定されているのかは、これまであまり論じられてこなかった。

本論ではロマンス劇におけるヒロインの役割について再考し、『冬物語』に登場する二人のヒロイン、ハーマイオニとパーディタの特徴と役割を分析し比較しながら、ハーマイオニの死と復活（真の死とは言えず、それゆえ真の復活ということも

できないのだが、記述の便宜上、この表現を使用する。）が作品にもたらす影響と作中の役割を解き明かしたい。その上で、同作家による多作品では見られない、観客をも騙す劇構成に含まれる意味と作品解釈に及ぼす影響を、文学的見地から読み取することを目的とする。

2. 研究の結果

ロマンス劇は、シェイクスピアが伝統的なロマンス劇の型に、空想的かつ非現実的な要素を取り入れた劇である。シェイクスピア独自の要素を加え、作劇の原点を再構築したものであり、二十年以上に渡るシェイクスピアの劇作のひとつの完成形であると考えられる。死と復活という現象はロマンス劇中に共通して表れ、ロマンス劇最大の特徴である、悲劇から喜劇への転換を示す重要な要素といえる。『冬物語』ではハーマイオニの死と復活の場面がその重要な役割を担っているが、同時にいくつかの特殊な効果を与えていることがわかった。

神の力や奇跡など、超自然的な要素が大きな役割を持つロマンス劇だが、ハーマイオニの復活においてはその一切が排除されている。奇跡の関与が否定され、「生きていた」という現実的な現象が復活をもたらしている。これらの描写から、シェイクスピアはハーマイオニの復活から、意図して超自然的な力の関与を排除していると読み取れる。

また、この場面ではハーマイオニが生きていた事実を観客に隠すことによって、観客と劇中の登場人物を同じ視点に立たせている。それまで観客は、劇中におけるすべての出来事の裏側を知る特権を得ている。ハーマイオニの復活は、観客から

その特権を奪うと同時に、彼らを登場人物の視点に引きずり込むと考えられる。また、他のロマンス劇の復活や帰還では、通常、超自然的な力によって展開に合理性が持たされている。復活の場面では、超自然的な力の排除によって合理性が失われ、観客は現実的根拠を持たない純然たる虚構を受け容れざるを得ない。つまり、復活の場面は、観客に登場人物の視点を与えながら、主観的に虚構を虚構として体験させる効果をもたらしていると考えられる。

そして、この場面に至るまで、観客は認識していたハーマイオニの死について真偽を知ることができず、「生きていた」という事実についても詳細を知ることができない。そのため、観客とハーマイオニが生きていたことを知らなかった人物は、自らが認知していたハーマイオニの死も、突如知らされた彼女の生も同時に認めなくてはならない。彼らにとってハーマイオニが活着していることは、実際に目の当りにしている疑いのような事実である。しかし、それ以前には彼女の死についても、それが事実であったと信じるに足る材料を与えられていた。ここで観客と一部の人物は、ハーマイオニの死に直面したという体験に引きずられながらも、ハーマイオニが活着しているという目の前の事実を認識することになる。いくつもの不確定な可能性を持ったまま、ハーマイオニの復活を受け容れざるを得ない観客にとって、ハーマイオニの死は擬似的な死となるといえる。

最後に、復活の場面における神の力や奇跡の排除は、他の劇に見られるヘレニズム的世界観やヘブライズム的世界観の否定とも読み取ることが出来る。シェイクスピアは他作品において、ヘレニズム世界と聖書的世界を混在させている。特にロマンス劇においては、悲劇から喜劇への転換場面でこれらの力を関与させている。しかし、復活の場面ではどちらの力の関与も示唆されていない。このことから、シェイクスピアはヘレニズム的世界観ともヘブライズム的世界観とも異なる、別の世界観を提示していると思われる。その世界観は、目にしている虚構を受け止め、ありえないことを真であると認める姿勢によって到達できる。その姿勢は、芝居という虚構と、その虚構にそぐわない「生きていた」というあまりにも現実味ある事実を同時に、かつありのままに受け容れるための、虚構に対する信仰を必要とするだろう。

3. まとめ・今後の課題

神の力や奇跡など、超自然的な要素が大きな役割を持つロマンス劇だが、ハーマイオニの復活についてはその一切が排除されている。奇跡の関与が否定され、「生きていた」という現実的な現象によって復活がもたらされていることによって、それまで観客が信じていたハーマイオニの死という事実が、突然不安定なものとなる。いくつもの不確定な可能性を持ったまま、ハーマイオニの復活を受け容れざるを得ない観客にとって、ハーマイオニの死は擬似的な死となるといえる。

ハーマイオニの擬似的な死が表すところは、シェイクスピアは他作品の世界観においてよく議題に出される、ヘレニズム的世界観、ヘブライズム的世界観のどちらとも異なる新しい世界である。それは虚構への信仰によって生まれ、すべての劇が本来持っているはずである、普遍的な世界観である。『冬物語』におけるハーマイオニの擬似的な死は、シェイクスピアが観客に用意した、虚構と現実、相反するものを受け容れることで到達できる、純粋な観劇体験そのものを表しているものであるといえるだろう。

今後の課題としては、シェイクスピアの生涯、政治的・時代背景を踏まえ、本研究で読み取れたシェイクスピアの意図にどのような影響を及ぼしているのか、より詳細に調査することが挙げられる。また、ハーマイオニの復活の場面、またはその構造が、本劇以降、特に本劇が評価され始めた19世紀以降の作品、もしくは他の作家にどのような影響を及ぼしているのかを明らかにすることも、課題として今後の研究に役立てたい。

主要参考文献

- [1] Shakespeare, William. *The Winter's Tale*. Ed. Pitcher, John. London: The Arden Shakespeare, 2010.
- [2] A. B. Taylor, *Shakespeare's Ovid: The Metamorphoses in the Plays and Poems*. Cambridge: Cambridge University Press, 2000.
- [3] フライ, ノースロップ 海老根宏他 訳『批評の解剖』, 東京: 法政大学出版局, 2013.

金子みすゞの投稿童謡研究

A study on Misuzu Kaneko's works : contributed poems for children

今井 希

Nozomi Imai

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 言語文化学専攻 日本文学専修

キーワード：金子みすゞ，童謡，西條八十，イマジネーション

Key words : Misuzu Kaneko, poems for children, Yaso Saijou, imagination

1. 目的と方法

金子みすゞが「童話」に投稿した作品のうち、「砂の王国」と「大漁」の二作品が、師と仰いでいた西條八十に「イマジネーションの飛躍がある」と評価された。この西條八十の言った「イマジネーションの飛躍」とは何だったのか、また投稿した雑誌ごとにはどのように「イマジネーションの飛躍」というものが現れていたのかを修士論文の研究テーマとした。

研究の前に「イマジネーションの飛躍がある」作品とはどういうものを定義した。

「砂の王国」は、「イマジネーション」を働かせて新しいものを作り出し、読者に異次元の世界を創造させるもの。「大漁」は、人間の視点からものごとを見たときに、視点は人間のまま変えずに、弱いものや小さいもの、見えないものの立場も考えるもの。この二種類を「イマジネーションの飛躍がある」と考えられる作品とした。さらに「イマジネーションの飛躍」が見られない作品の特徴として、視点は人間ではなく別のものの立場になり切っているものと、人間が見ている光景をそのまま描いたものとの二種類考え、全体を四種類に分けた。

2. 結果

〈童話〉

「童話」に掲載されたのは39作品であった。掲載された順に見ていくと、大正13年1月「砂の王国」で「イマジネーションの飛躍がある」と評価される以前は、何も意識せずに作られたものではあるが、中でも「童話」に投稿されたものには「イマジネーションの飛躍がある」と考えられ

るものが多くみられることがわかった。ここから、みすゞが西條八十の求める童謡というものを捉えていて、それに合う作品を選んで投稿していたのだろう、ということが見えた。そして大正13年1月の「砂の王国」、大正13年3月の「大漁」の二作品で「イマジネーションの飛躍がある」と評価されてからは、その西條八十の求める童謡というものははっきりとわかった。その求められているものははっきりと見えてきてからみすゞはさらに自分の童謡を、西條八十の求めているものに合わせようと試行錯誤した。

西條八十から吉江孤雁へと選者が代わった大正13年7月～大正14年10月は、選考基準が大きく変わってしまった。西條八十の言う「イマジネーションの飛躍がある」と考えられる作品の多くが、掲載された時に吉江孤雁からの選評がなく、反対に「イマジネーションの飛躍」がないものばかりが評価された。選者が吉江孤雁に代わったと同時に「童話」で評価される作品の傾向も大きく変わってしまった。

西條八十が再び「童話」の選者として戻ってきた大正15年4月～大正15年7月に作られたみすゞの童謡には、当時の「イマジネーションの飛躍」を思い出させるような作品があった。しかし大正15年7月でいきなり「童話」が廃刊となった。

〈婦人倶楽部〉

子ども向けの「童話」とは対象が異なる婦人向け雑誌「婦人倶楽部」には、みすゞの作品は大正12年9月「芝居小屋」、大正12年11月「瀬戸の雨」、大正13年2月「手帳」の3作品が掲載された。「婦人倶楽部」の選者も西條八十で、1作目

には「イマジネーションの飛躍」は見られなかったが、2, 3 作目には「イマジネーションの飛躍」が見られる作品が掲載された。

〈金の星〉

「金の星」に掲載されたのは1作品のみであった。大正12年9月に掲載された「八百屋の鳩」は、選者が野口雨情であったため、「童話」で西條八十が言った「イマジネーションの飛躍」のようなものは見られず、現実的な日常生活を連想させるものだった。これは「金の星」に掲載する選考基準に合わせたためである。「赤い鳥」がやや高踏的であったので違うものにしようと、「内容も用語も活字の組み方なども、『こどもらしい』点を心がけたい」とした趣旨に合っていることから、野口雨情が選出した。

〈赤い鳥〉

「赤い鳥」には大正13年10月の「田舎」、大正14年1月の「入船出船」、大正14年2月の「仔牛」の3作品が掲載された。

1作目には、「砂の王国」のような「イマジネーションの飛躍」が感じられる作品であったが、2, 3作目には、目の前の光景をそのまま童謡にした作品で「イマジネーションの飛躍」は見られなかった。時代別に見てみると、西條八十が渡仏してしまって自身の投稿が減ったことが原因の1つとして考えられ、この2, 3作目を制作していた頃は「イマジネーションの飛躍」が見られる作品が非常に少ないことがわかった。

3. まとめ

雑誌ごとに「イマジネーションの飛躍がある」かどうか調べたので、さらに角度を変えて時代別に見てみた。

まずは金子みすゞが童謡を書き始め、雑誌に登場したばかりであった大正12年9月～11月に焦点を当ててみた。このころは、本研究のテーマとしてきた「イマジネーションの飛躍がある」と評価される前のことである。それを踏まえた上で見てみると、西條八十は当初から「童話」に掲載する作品に「イマジネーションの飛躍がある」とされる作品を求めていることがわかった。またみすゞ自身も「イマジネーションの飛躍がある」と感じた作品は、「童話」に投稿する傾向が強かった。

次に注目したのは、西條八十が渡仏してしまっ

た。大正13年12月から5か月間は、どの作品も見えた光景をそのまま童謡にしたものばかりであったことがわかった。これは師と仰いでいた西條八十が選者ではなくなってしまう、みすゞの童謡を作る気持ちが少し離れてしまったことから来ている。西條八十が渡仏してしまったことで投稿する作品自体少なくなり、前のように「イマジネーションの飛躍」が見られるような作品が少なくなってしまう。西條八十に代わって選者となった吉江孤雁の選考基準も、西條八十とは異なりみすゞの童謡とも合わなかった。

そしてもう1つ注目したのが、西條八十が「童話」の選者として帰ってきてからである。大正15年4月～7月までは、ひと月ごとに「イマジネーションの飛躍」が見られる作品と、見られない作品を交互に投稿していた。西條八十が「童話」の選者に帰ってきてまた評価してもらえることが嬉しく、童謡作りを試行錯誤していたことがわかった。

4. 今後の課題

本修士論文では、西條八十が「童話」の選者をしてきた頃の、みすゞが一番自由に童謡を作っていた頃の作品を取り扱ったため、「童話」が廃刊となった大正15年7月までを今回の研究課題とした。

今後は、金子みすゞが結婚した後、また出産した後ではどのような傾向が見えてくるのか、雑誌「愛誦」「燭台」を中心に研究する。

主要参考文献

- [1] 「童話」大正12年9月～大正15年7月
- [2] 『童謡詩人金子みすゞの生涯』矢崎節夫, JULA 出版局, 1993年2月26日
- [3] 「別冊太陽 日本のこころ122号」編・湯原公浩, 平凡社, 2012年1月11日
- [4] 『日本近代文学大辞典』編・日本近代文学館, 小田切進, 1977年11月18日
- [5] 『金子みすゞ作品鑑賞事典』編・詩と詩論研究会, 勉誠出版, 2014年11月10日
- [6] 『金子みすゞ童謡全集①～⑥』監修・矢崎節夫, JULA 出版局, 2003年10月24日

国語教科書の諸相

——教材と指導をめぐる問題

Various aspects of Japanese textbook
——Problem over the teaching materials and the instruction

小林 莉恵
Rie Kobayashi

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 言語文化学専攻 日本文学専修

キーワード：国語教科書，ジェンダー，読解
Key words：Japanese textbook, gender, reading

1. 研究目的

学校における学習活動の中核を担う教科書は、児童生徒に多様な情報を伝達するメディアとして重要な役割を果たしている。

現在、日本の中学校・高等学校においては、約 6796 万冊（2012 年現在）の教科書が採択されている。今日に至るまで、教科書制度の改革や教科書採択をめぐる事件など、教科書に関する多数の変革や問題が起きたが、今日においても問題は尽きていない。

先行研究によると、教科書は現在も採択や教材の選択における問題、ジェンダーの観点と関わる問題など、様々な問題を抱えている。

そこで、修士論文では、1980 年代からの流れについて分析している先行研究を参考にしつつ、2010 年代の日本の中学校国語教科書を対象とし、教材と指導の観点から、学校における現代国語教科書の諸相を検討、考察した。

2. 国語教科書の現状

現在、中学校国語教科書において高い占有率を維持しているのは、光村図書、東京書籍、三省堂、教育出版、学校図書の五社である。占有率が最も高いのは光村図書であり、全体の 63.8%（233 万 7788 冊）を占める。次に、東京書籍（13.8%）三省堂（分冊の計 6.5%）教育出版（12.1%）学校図書（3.1%）と続く。

鍵主智美（2008）によると、国語教科書における、作者、登場人物、作品の主人公となって

いる人物の登場頻度には男女差があり、全てにおいて女性に比べて男性の比率が高いという。近年は男女差が小さくなる傾向が見受けられる一方で、近年の教科書における男女の登場頻度や表現には明確な差が存在しているとされている。

斎藤美奈子（2001）の指摘では、男性を主体とした物語の話系と、女性を主体とした物語の話系は大きく異なることが示されている。男性主体の物語の話系は、敵との戦闘が主であり、自分とは異なる外観や自分の尺度にあてはまらない姿をしているものなど、異質なものを排除する傾向にある。一方、女性主体の物語の話系は、ファッションと恋愛、またその延長にある結婚や家庭が価値を持ち、異性愛への執着や夢と現実の錯綜状態が存在するものであるとされている。

また、中学三年国語教科書における編集委員の男女の比率を調査したところ、全ての発行者において女性よりも男性の比率の方が高いという結果に至った。

3. 国語教科書をめぐる問題

木村松子（2014）によると、国語教科書は、文学作品を教科書教材として教科書に記載することで、作品本来の意義とは異なる読解を促す可能性を持っているという。

例えば、作品本来の意義とは異なる読解を促す可能性を持つ例として、1977 年以降、教科書

に記載されている小学校2年生国語教材『スイミー』（レオ・レオニ作、谷川俊太郎訳、光村図書、2013）が挙げられる。

原作絵本と教科書に記載された訳本を比較すると、絵は全て同じであり、訳文もほぼ忠実である。しかし、突出した表現もみられる。作品中に、原作では使用されていない「ミサイル」という表現を追加した点である。

原作では、主人公と対立する立場の者に関する描写に「came darting」という速さを表す慣用語が用いられていたが、教科書では「ミサイル」という言葉を使用し、武器と関わる表現に置き換えられている。

また、原作と教科書の挿絵を比較すると、教科書では、14場面中、作品の意義と密接に関わる9場面、あるいは7場面の絵が削除されており、教科書が原作とは異なる解釈を促す可能性を持っていることが指摘されている。ここでは、作品を教材として教科書に用いる際に、戦いの物語へと導く力が働いている。

このように、文学作品を教科書教材として用いる際、児童生徒の思考や読解をある一定の方向に導く力が働く点に国語教科書の問題点がある。

4. まとめ

国語教科書においては、作品の一部が削除された状態で記載されることがある。これは、教科書の紙面が限られているという物理的な限界との関わりがあるが、それだけに止まらない。

設問等を使用した学習において、教科書に反する意見や、教科書から外れた思考を排除する力が働くという点に、教科書の限界を確認することができる。

教科書には、作品が持っている意味や意義を排除し、読者の思考をある一定の方向に、一元的に向けてしまう力がある。これは、テキストの中にある作品本来の大義性や可能性を排除するという、国語教科書が抱える重大な問題である。

読解を行う上での重要な要素として、テキストから多様な読みの可能性を創出する、批判的な読解が挙げられる。生徒の思考を誘導することは、読みの可能性を制限することにもつながるのである。

このように、国語教科書は、教材を用いて、各作品が持つ特質を変質させ、一定の方向に導くという側面を持っている。

しかし、同時に、国語教科書は、教材の持つ、読みの可能性を創出することを可能にする力も持っている。国語教科書を用いた学習においては、設問や読解における課題に対する答えは一つに特定されない。そのため、教材を用いた指導や児童生徒の学習活動を通して、多様な答えを導き出すことができる。

現在、教材を用いた読解や学習、活動を通して養った思考力・判断力・表現力等の力を実生活に活かすことが重視されていることから、実生活とのつながりを意識した学習の実現が求められている。

児童生徒が「何を学ぶか」に限らず、「何ができるようになるか」が重視される現在、国語教科書に求められるのは、児童生徒の複数性を活かす指導の実現である。

主要参考文献

- [1] 鍵主智美「国語教科書と日本語教科書の比較：ジェンダーの視点から」（『金沢大学経済学部社会言語学演習』2008.3）
- [2] 樺島忠夫他『中学校 国語3』光村図書、2012.2
- [3] 加藤周一他『伝え合う言葉 中学国語3』教育出版、2012.1
- [4] 河野銀子『教育社会とジェンダー』学文社、2014.4
- [5] 木村涼子『学校文化とジェンダー』勁草書房、1998.4
- [6] 斎藤美奈子『紅一点論』筑摩書房、2001.9
- [7] 三角洋一他『新しい国語 3』東京書籍、2012.2
- [8] 内外教育編集部『データで読む教育 2011～2012 調査・統計解説集』時事通信社、2012.4
- [9] 中瀬正堯他『中学生の国語 三年』三省堂、2012.2
- [10] 野地潤家他『中学校 国語3』学校図書 2012.2
- [11] 文部科学省『中学校学習指導要領解説 国語編』ぎょうせい、2008.9
- [12] 文部科学省『中学校学習指導要領解説 総則編』ぎょうせい、2008.9

学ぶ力と支えるまなざし

児童英語教育におけるスキヤフオールディングの前提

The prerequisite for scaffolding in English education for Japanese pupils

渡邊 万里子

Mariko Watanabe

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 言語文化学専攻 英語文学・英語教育専修

キーワード：児童英語教育，スキヤフオールディング，自律的学習，人間的成長

Key words : English education for Japanese pupils, scaffolding, autonomous learning, personality development

1. 研究の背景・目的

第二言語教育分野では，教師学習者間のインタラクションがいかに学習者の言語習得を促進するかについて，これまで多くの研究がなされてきた。学習者が第二言語による運用力を習得することが第二言語教育のゴールであることは言うまでもないが，「生きる力」が意味するところの問題解決能力や自律性もまた，第二言語教育によって本来育まれるものである。知識の側面だけでなく，こうした学習者の人間的成長への貢献は英語教育に本来伴うものであるが，そうした視点からは十分な研究がなされていない。児童英語教育の変革期にある今こそ，その普遍的な意義について議論が必要である。本研究では，児童英語教育において，児童が指導者とのインタラクションを媒介して自律的に課題を達成するまでの過程の質的分析を行い，児童英語教育の普遍的意義である人間的成長への貢献について考察する。

2. 方法

第二言語教育における教師学習者間のインタラクションの効果を明らかにする研究としては，訂正フィードバック研究と，Vygotsky の発達の最近接領域（ZPD）の概念を核としたスキヤフオールディングの研究がある。訂正フィードバック研究では，学習者にどのような情報を与えるかによって，フィードバックのタイプが 6 種類に分類されている（Lyster & Ranta, 1997）。ZPD とは，子どもが独力で問題解決可能なレベルと，大人やより有能な者の支援のもとで可能になるより高度なレベ

ルの差で，その支援を「スキヤフオールディング」と呼ぶ。しかしスキヤフオールディングについては，あらゆる教師の支援を意味するために用いられて定義が緩いとの批判があり，Maybin *et al.* (1992) は最終的に学習者を独力で同種の課題を達成できるレベルへ向上させる特別な支援と定義した。つまり，学習者が支援を受けて課題解決に取り組み，その結果支援を受けず自律的に同種の課題を達成できるようになれば，与えられたその支援はスキヤフオールディングとして機能したことになる。そして，その状態を ZPD が埋められた，すなわち学習者が発達したと見なすのである。これらの先行研究を再検討し，両者を応用して児童英語教育の文脈に合わせた新たな分析の枠組みを設定した[表]。

表. 児童英語教育における指導者の支援

| | |
|--------------------------|--|
| 解決策を示す 教師は | リキャスト 教師は学習者に解決策を教える。 |
| | 発言・学習行動補助 教師が解決策を示すのと，学習者が課題達成をするのがほぼ同時に起こる。教師は解決策を示すが，学習者もまた自ら課題達成に至ろうとする。 |
| (学習者自らが課題達成に至る) プロンプト | メタ認知的手がかり 教師は課題達成のための手がかり（解決策の例や，課題達成の方法など）のみを学習者に与える。 |
| | 誘導 学習者から直接解決策を引き出すような働きかけをし，課題達成に導く。 |
| | 奨励 学習者が発言や行動を躊躇する時に，励まして活動を促す。 |

この利点は、児童の課題達成に関わると考えられるあらゆるコンテクストを分析対象に含み、児童の学習活動を言語面に限定せずより包括的に捉えられること、またスキヤフオールディングを学習者の自律性をもたらす特別な支援として扱って、児童が自律的に課題達成するまでの過程を捉えられることにある。児童英語教室の4クラスの活動をビデオで撮影し、トランスクリプトを作成した。そのデータを質的に分析する。

3. リサーチ・クエスチョン

- 1) 児童はどのように指導者の支援を媒介して課題を達成するのか。
- 2) 指導者の支援が機能するための前提条件は何か。
- 3) 支援はどのようにスキヤフオールディングとなり、児童はどのように自律的に課題を達成するのか。
- 4) 支援がスキヤフオールディングになる前提条件は何か。

4. 結果

リサーチ・クエスチョンに対して以下の知見が得られた。

- 1) 児童が支援を受けて課題を達成する過程には、四つの特徴がある。第一に、児童英語教育における指導者の支援には、「奨励」「発言・行動補助」の特徴的な支援がある。第二に、児童の第二言語知識は実に限られており、指導者の示す解決策の再生は課題達成に不可欠である。その一方で、児童は限られた知識や与えられたヒントを活用して自ら課題達成に至る力を備えている。第三に、児童は自分がよりよく課題を解決するための方法である非言語的な学びを得ている。最後に、指導者の行為は同じであってもコンテクストによって児童が受ける支援の質は異なる。
- 2) 児童に解決策を与える支援（リキャスト、発言・行動補助）は無条件に機能し、児童の課題達成を可能にする。児童自らの課題達成を可能にするプロンプトを機能させるには、前提条件として児童は活動目的を理解していなければならない。
- 3) 支援を受けて課題を達成した児童がその後同種の課題を自律的に達成できるようにするス

キヤフオールディングに加え、支援を受けてある児童が課題を達成するまでの指導者とのインタラクションが別の児童の自律的な課題達成をもたらす間接的スキヤフオールディングが観察された。どちらにおいても、児童は自分がよりよく課題を解決するための方法を、指導者が直接的に働きかけなくても支援から学び取っており、それにより自律的な課題達成が可能になる。

- 4) リキャストは間接的スキヤフオールディングになり、学習者を自律的に課題達成できる段階へと発達させることがある。プロンプトはスキヤフオールディング、あるいは間接的スキヤフオールディングになり、学習者を自律的に課題達成できる段階へと発達させることがある。支援がスキヤフオールディングになる前提条件は、児童に活動目的の理解があることである。ただしこれは必要条件ではあるが、十分条件ではない。

5. まとめと今後の課題

英語学習活動を通じて児童がメタ認知能力を発達させながら自律性を獲得することが証明され、また、協同的な学びが間接的スキヤフオールディングの形で明らかにされた。すなわち児童英語教育は未来に自律的な学習者となるための素地を育む場であり、そこでは人間的成長が図られる。

英語教育がもたらす人間的成長が明らかになるにはより長期的な研究が必要だと思われる。その始まりの段階に貢献できる児童英語教育の普遍的意義を引き続き主張しながら長期的に観察を行い、さらに具体的にいかなる英語学習活動がどのような児童生徒の人的資質・能力の育成につながるかを記述することが今後の課題である。

主要参考文献

- [1] Lyster & Ranta. (1997) "Corrective feedback and learner uptake"
- [2] Maybin, J., Mercer, N., and Steirer, B. (1992) "Scaffolding' learning in the classroom."
- [3] 渡邊寛治 (2010) 「『外国語活動』における Communication Abilities の考察—定義とその素地の育み方及び見取り方について—」

架空戦記の戦争表象

—荒巻義雄『紺碧の艦隊』と歴史修正主義—

War representation of fictional war novel

—Yoshio Aramaki “Deep blue fleet” and Historical revisionism—

清水 沙也加

Sayaka Shimizu

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 言語文化学専攻 日本文学専修

キーワード：架空戦記，荒巻義雄，『紺碧の艦隊』，戦争表象

Key words : fictional war novel, Yoshio Aramaki, “Deep blue fleet”, war representation

1. 目的

この論文の目的は，荒巻義雄による架空戦記作品『紺碧の艦隊』を戦争表象の一形態として捉え直すことである。

架空戦記とは，歴史上の戦争，戦乱に「もし〜であったら」という発想で史実にはない要素を加え，物語上で史実と異なる結末を迎えさせる内容の作品のことである。この架空戦記作品には第二次大戦を題材としたものが多数存在し，物語の中では日本は敗戦することなく，史実とは違う結果の結末を迎える。この架空戦記作品の中にはヒット作品と呼ぶことのできる作品が複数存在する。その中でも代表的な作品が，荒巻義雄『紺碧の艦隊』である。

架空戦記はこれまで，文学研究の分野においては，研究の対象とはされてこなかった。しかし，これまで研究対象とはされてこなかった作品を対象に加えることで，日本における戦争認識の問題について，新たな観点を加えることができると考える。

2. 架空戦記の成立

現在の架空戦記作品は，新書版のノベルズの形態で発行されるエンターテインメント小説であり，一定の読者を獲得している。だがその誕生は明治時代にまで遡る。

「架空の戦乱，もしくは戦争を描く」という特徴を持った，最初期の架空戦記と呼べる作品は，明治時代の架空未来戦記である。フランス軍士官とされている談理大尉による『軍事小説 明日之戦争』

(兵事新報社 1894)，アメリカ軍士官とされているハミルトン大尉による『日米開戦未来記』(都新聞・1897・9)などがある。これらの架空未来戦記は，その名の通り「これから起こるかもしれない」戦争について描いた作品であるが，楽しい読み物の形をとって，大衆に世界情勢や軍事に関する知識を啓蒙する目的で発行されていた。

同じ目的の作品群として，戦時冒険小説がある。山中峰太郎『亜細亜の曙』(大日本雄辯会講談社 1932・9)，海野十三『浮かぶ飛行島』(大日本雄辯会講談社 1939・1)などだが，これらは日本軍の架空の作戦などが描かれ，「少国民」たちの戦意の高揚を目的としていた。

こういった架空の戦争を描いた作品群はその後，敗戦を機に断絶するが，戦後，日本でのSFジャンルの発展の中で復活する。半村良「戦国自衛隊」(早川書房『SFマガジン』1971・9)以降架空戦記が再び書かれるようになり，現在の架空戦記とほぼ同じ形になったのは1980年代に入ってからである。この1980年代に『日本本土決戦—昭和20年11月，米国皇土へ進行す！』(光人社1981・11)の桧山良昭，そして『紺碧の艦隊』(徳間書店1990・12)の荒巻義雄という，その後の架空戦記ブームの担い手となる作家が誕生する。

こうして戦後新たな誕生を遂げた架空戦記は1980年代の後半にブームを起す。10代から20代の若い男性を中心に幅広い層から支持を得，ベストセラーと呼べる発行部数を記録するタト

ルが登場するが、エンターテインメント性の強い戦闘描写などが原因となり、架空戦記の流行を危惧する声も上がっていた。

その後、架空戦記は他のジャンルの影響を受けながら表現を多様化させていき、ブームは収束していった。

3. 荒巻義雄と『紺碧の艦隊』

荒巻義雄は 1933 年生まれの日本の SF 作家である。1970 年、「大いなる正午」で『SF マガジン』においてデビューし、幻想的な SF 作品を発表した。

その後『ニセコ要塞 1986』(中央公論社 1986・7)で架空戦記作品に進出、架空戦記作品の『紺碧の艦隊』が人気を呼び、幻想 SF 作家から架空戦記作家として認知されるようになる。

そして、『紺碧の艦隊』は、荒巻義雄により徳間書店のトクマノベルズから 1990 年 12 月に発表された架空戦記小説である。『紺碧の艦隊 1—運命の開戦—』からシリーズは 20 巻を数え、続編に『新・紺碧の艦隊』シリーズ、関連作に『旭日の艦隊』、『新・旭日の艦隊』シリーズがあり、すべて併せて『艦隊』シリーズと称する。

1980 年代後半から 1990 年代にかけての架空戦記ブームで人気を呼んだ作品の中でも一際人気を集め、コミック、アニメ、ゲーム化といったメディアミックスも行われた。

『紺碧の艦隊』は、第二次大戦中に戦死したはずの山本五十六が記憶を保ったまま「後世」世界に転生、高野五十六として転生前の世界と同じ歴史をなぞる「後世」世界においても開戦が予想される日米大戦を勝ち抜くべく、自分と同様の転生者を集め「紺碧会」を結成。国の単位を超えた黒幕に先導された日米大戦は避けられず、紺碧会は秘密艦隊「紺碧艦隊」を組織する。「前世大戦」の反省を生かしながら高野五十六は同様の目的を持った組織「青風会」を組織した大高弥三郎と共に、画期的な新兵器や奇想作戦、そして人道的政策によって、早期講和を目指しながら日米大戦を勝ち抜いていく。米国民の支持を得ることで米国との講和を成し遂げた日本の戦争は、欧州戦線へと移行、来る最終決戦を見据える、という内容である。

登場人物には、架空の人物はもちろん、読者の名前がつけられた登場人物、歴史上の人物をもじった名前をつけられている人物の他、史実の人物のままか、史実の人物をモデルにした作中人物なのか曖昧にされている人物も存在し、混在してい

る。これらの登場人物のうち、「転生者」と作中で表現される人物たちは事あるごとに「前世大戦の反省」を語り合う。その解説役になるのが語り手であるが、その語り手もまた、大戦の反省の立場で語っており、作品全体から歴史の見直しへの呼びかけが繰り返されている。

4. 『紺碧の艦隊』と歴史修正主義

『紺碧の艦隊』はノベルズ版のあとがきにおいて読者との交流が行われており、後に読者コーナーとして独立する。そこからは読者の『紺碧の艦隊』の歴史に関する記述に対しての深い関心が読み取れる。

しかし、ルーズベルト陰謀論による開戦挑発説の立場を取っている、歴史修正主義について、その背景には深い言及を行わずに紹介をしているなど、「教科書には書かれていない歴史を『紺碧』から学んだ」と手放しで受け入れて問題がないと言い切ることにはできない。

だが、エンターテインメント性の強い物語と共に書き込まれることで読みやすくなった歴史についての考え方は、新たな知識を得たという感覚と共に受け入れられていく。『紺碧の艦隊』に歴史の見直しを行う要素があることで、けして、日本正義があったという内容ではなくても、公には知られていない歴史があり、そこでは日本の戦争責任についてまた違った内容がある、ということを経験させてしまう働きがあったのである。

日本で歴史修正主義が台頭したのは 1990 年代後半からである。年代の一致や歴史の読み直しという共通点から、一般読者、特に架空戦記の主な読者層であった若い世代に対して歴史修正主義的な考え方を受け入れることのできる土壌を作る働きがあったことが指摘できるのではないかと。

第二次大戦に題材を取った作品のなかでも、とくにサブカルチャーに分類される作品にはこれまで研究の対象とされてこなかったものが存在する。日本における戦争認識の問題を考えるために、それらの作品群も分析する必要があると考える。

主要参考文献

- [1]川村湊他著『戦争文学を読む』(朝日新聞出版 朝日文庫 2008 年 8 月)
- [2]如月東『シミュレーション戦記批判序説 落日の艦隊』(ベストブック 1998 年 8 月)
- [3]横田純彌「近代日本奇想小説史」(『SF マガジン』2002 年 1 月号～)

介護福祉士養成課程における「介護実習劇」の試み

—演劇的手法を用いた実習事後指導の可能性—

A Study on the Value of "the Dramatization of Practical Training"
in the Course for training licensed care workers
—A method of guidance after the students' practical training—

市原 浩美

Hiromi Ichihara

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 人間生活科学専攻 児童発達臨床学専修

キーワード：介護福祉士養成，実習事後指導，介護実習劇

Key words : Care Worker Training, Reflection After Practice, Care Practice Play

1. 研究目的

介護福祉士養成課程の現行カリキュラム (H.21) では、理論と実践の融合を見直しの背景とし、座学(「人間と社会」「こころとからだのしくみ」と演習科目(「介護」)を実習において結びつけることが不可欠であるという指針が掲げられている。それに伴い、450 時間の「介護実習」と共に、実習事前・事後指導を行う 120 時間の「介護総合演習」が設定されている。占部ら(2012)は、学生の不安が最も高まる実習後における新しい事後指導法の開発を強調しているが、レポートや個人発表による従来の方法を越えるオリジナルな指導法については、未だ研究が進んでおらず、劇制作と発表によって実習事後指導を行ったという前例は、これまでに示されていない。

そこで本研究では、筆者が A 専門学校介護福祉科 2 年次後期に 13 年間実施してきた「介護実習劇」制作と発表による実習事後指導の方法を検証し、演劇的手法を用いた「総合的な実習事後指導」の教育方法とその有効性を可視化することを目的としている。

2. 研究方法と内容

〔方法〕第 2 章で、演劇を活用した教育、モレノの役割演技、介護職を取り巻く課題に関する先行研究を整理する。続く、第 3 章では、2006 年度～2012 年度に劇制作を経験した卒業生 15 名を対象に行った半構造化インタビューを質的に分析した

結果を報告し、劇制作から発表までに学生たちが経験する「3 つの振り返りの場」《制作過程》《劇中場面》《劇発表》を明らかにした。それぞれの振り返りの場には、「《制作過程》における仲間の視点」「《劇中場面》における登場人物たちの視点」「《劇発表》における先輩・後輩の視点」が関与しているという結果が導き出された。

そこで、この 3 つの振り返りの場を分析枠組みに据え、2012 年度介護実習劇『一護百笑～ふみだす勇気がこころをつなぐ～』(上演時間 36 分)を考察対象とし、第 4 章で、実践報告による「制作過程」(第一の振り返りの場)の考察、第 5 章で、台本分析による「劇中場面」(第二の振り返りの場)の考察、第 6 章で「劇発表」(第三の振り返りの場)の効果についての考察を試みた。

〔内容〕第 4 章では、実践者＝研究者の立場で博士論文を書き上げた高尾(2006)の記述方法を参考とし、2012 年度後期授業第 1 回から第 10 回までを記録した IC レコーダー、教員の実践メモを基に劇づくりに参加する学生の姿勢や教員の動きを明らかにするため実践報告の詳述を行った。そこから、制作過程における現役生と社会人学生の特性、ファシリテーターとして教員の役割、「書く」「演じる」「観る」「修正する」劇づくりのサイクルを明らかにした。また、演劇的手法を用いた指導方法に関しては、ウォームアップによる導入、ティーチャー・イン・ロールによる展開、ストーリーによる統合という指導の特徴を明らかにした。

第5章では、2012年度の完成台本を分析の対象とし、2人の主人公（実習生）のキャラクター設定とストーリー展開、葛藤場面のテキスト考察を行った。そこから、実習生の葛藤場面は、「実習生の失敗→職員のフォロー」の流れを踏んで物語が作られている点や、実習生の葛藤だけでなく、利用者の葛藤、職員の葛藤も同時に表面化するというストーリーの特徴を明らかにした。

第6章では、ブレヒトが提唱する「異化効果」を取りあげ、学生たちが自分の実習体験を「異化」することで得られる新たな発見や介護観を、後輩たちに伝達する場として、劇発表の場が機能しているのではないかと考えられた。

3. 研究の結果

本研究で明らかになった演劇的手法を用いた実習事後指導の有効性は次の通りである。

第一に、「介護実習劇」は、ストーリーを構築していくことで、「介護総合演習」（実習の振り返り）、「生活支援技術」（コミュニケーション技術や介護技術）、「介護過程」（利用者の全人的理解とアセスメント）3科目の学びを統合させた指導を行うことが可能になり、動きながら考えることを学生に要求するため、「理論と実践の融合」を促す体系的な学習方法として適していると考えられた。

第二に、介護職を取り巻く課題についてであるが、谷（2010）や今井（2011）が指摘する職員との人間関係が進路選択や離職に影響を及ぼしている現状に関して、「介護実習劇」による事後指導は、学生を「実習生の視点」から「職員の視点」に引き上げ、「もし自分が職員だったらどうするか？」という問題解決型思考に導くという利点が見出された。また、草薙（2011）や家高（2011）が指摘している社会人学生参入に関する授業展開の課題に関して、動きながら考えることが得意な現役生と知識豊富な社会人学生が協力して行う劇制作は、互いの不足点を補い合いながら、異年齢間のコミュニケーションを促す効果的な方法であると考えられた。さらに、「価値」に着目するとみえてくるとされる介護の専門性（中村，2014）については、「介護実習劇」発表の場が、介護の「価値」を後輩に伝える場として機能しているという劇発表の有効性が視えた。

第三に、介護実習の振り返りに演劇を活用することの有効性については、クラスメートの体験を

台詞にし、演じるという行為を繰り返すことによって共感が鍛えられる点や、劇づくりは実習生、利用者、職員、3者の視点からの振り返りを可能にし、学生のリフレクション範囲を広げることに貢献している点、さらに演劇のもつ「異化効果」が、「当たり前」を見直すリフレクションの目的に役立つという点が明らかになった。

4. 今後の課題

本研究では、2012年度『一護百笑』制作の第1回から第10回までの実践報告を記述したが、第11回以降は、ティーチャー・イン・ロールの性質が強まるため記載することができなかった。今後は第3稿（第11回の授業で作成）から第6稿（完成台本）の比較分析や、今回考察対象としなかった場面のテキスト分析を進め、介護実習劇の指導法とストーリー上の特徴をさらに明らかにしていきたい。また、後輩や教職員など劇発表を観る側への影響については、アンケート調査等を通して検証していく必要がある。

さらに、近年、大学でも導入が進んでいるアクティブラーニングの一つである「問題解決型授業」（Project Based Learning）との関連を探り、A専門学校における「介護実習劇」長期実践のサイクルを可視化していくことが今後の課題である。

主要参考文献

- [1] 関本昌秀(1972) 役割理論の黎明期とその意義—ミード、モレノ、リントンの貢献を中心として—、慶応義塾大学法学研究会法学研究 45(3).
- [2] 高尾隆 (2006) インプロ教育即興演劇は創造性を育てるか？、フィルムアート社.
- [3] Betty Jane Wagner(1976) Dorothy Heathcote Drama as a Learning Medium, National Education Association.
- [4] ジョン・P・ミラー(1997) 中川吉晴・吉田敦彦・桜井みどり訳 ホリスティックな教師たち—いかにして真の人間を育てるか？、学習研究社.
- [5] ブレヒト(1962) 今日の世界は演劇によって再現できるか—ブレヒト演劇論集—、千田是訳、白水社.

越境・都市・アナーキズム——安部公房と1968年

Violation of the border・urbanism・Anarchism——Abekobo and 1968

若林 綾

Aya Wakabayashi

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 言語文化学専攻 日本文学専修

キーワード：1968年，越境，文学と社会運動

Key words：1968, Violation of the border, Literature and social movement

1. 研究目的

安部公房のテキストは、1962年2月の共産党除名をきっかけに、「質的に政治にコミットしなくなった」と言われてきた（鳥羽耕史『運動体・安部公房』一葉社 2007年）。その転換点として語られるのが、同年八月に刊行された『砂の女』（新潮社 1962年）である。共産党除名を絡めて『砂の女』を読もうとするとき、それは安部の政治からの撤退をも示してしまう。しかし、安部テキストは政治にコミットすることを本当にやめたのだろうか。共産党時代とは違う形で、その後も政治的な問題に向かっていった可能性はないか。

特に注目したいのが、『砂の女』から数年後、「1968年」と呼ばれる社会運動の隆盛期だ。一連の社会運動の流れの中で、多くの知識人たちが、既成の社会体制に対する新しい力の登場を期待した。安部公房もまた、その内の一人であり、当時、多くの「予感」を口にしていく。本研究の目的は、こうした残された「予感」をもとに「1968年」の安部の思想の実体を明らかにすることだ。

2. 対象作品と方法について

「1968年」における安部の思想をわかりやすく示したのものとして、「ミリタリィ・ルック」『中央公論』（1968年8月号）、異端のパスポート『中央公論』（1968年9月号）、「内なる辺境」『中央公論』（1968年11・12月号）の三本のエッセイがあげられる。これらは、当初から「地球が国境線によってすっかり分割しつくされた現在、これを破っていく異端の原理を探る^[1]」という共通のテーマの元に構想されていた。まずは、この「異端」がどのような手段で「国境線」を破ろうとしていたの

か、安部のいう「国家を越える、国境を否定するという思想^[2]」はどのようなものであったか、分析した。

次に、「1968年」に起きた事件について、安部の言説と同時代の作家の言説と比較することで、安部の主張が当時どのような意味を持っていたものであったか明らかにした。安部が言及した事件は意外にも少なく、1968年8月のチェコ事件と学生運動の二つがそれに当たる。

比較の対象にした作家は、安部と親交が深かったが、「1968年」における立場の違いから別離することになった三島由紀夫・大江健三郎と、学生運動の最中にいて学生たちに絶大な支持を得ていた高橋和巳となっている。

3. 国家を食い破るエッセイ

一連のエッセイから読み解いた安部の「国境を否定する思想」は、その契機を日常から見つけようとしているところに特徴がある。国境を破壊する「異端」の姿を、「同時代の感覚」を知らぬまに身につけてしまった現代人の中に見つけ、その「異端」の住処である「辺境」についても、昔は国家の外にあったものが、国家の内部である「都市」に移動してきたのだとされている。現代人はその気になればいつでも「辺境派の軍勢」になれるのだ。

「同時代の感覚」とは、国境の向こうにも同じような時間の流れがあると認識すること、全世界の時間の共有感覚のことをいう。この「同時代の感覚」は「1968年」の安部言説の中に頻りに登場し、越境の思想の根幹を支えるものでもある。

エッセイ掲載の翌年、1969年の6月に、安部は三島由紀夫と東大全共闘との討論の中や全学連の

スローガンに、自らを「無国籍者」であるとする主張を発見し、「共鳴」することになるのだが、同時に学生たちの国家に対する考え方の甘さも指摘した。学生たちは、日常の中に国家への反撃の契機を見出すのではなく、既に国家を否定する立場を取っていた。一連のエッセイ群が、世間に思うような反響を得られなかった中で、同じく国家を題材にし、学生たちに多く読まれた本がある。国家を既に「破産した神話」として、吉本隆明の『共同幻想論』（河出書房 1968年）だ。安部は、「無国籍者」の学生たちに「共鳴するところ」があり、期待もしたが、それが安部の期待する「辺境派の軍勢」と重なることはなかった。

4. 越境する「言葉」—チェコ事件

1968年8月20日、「人間の顔をした社会主義」を標榜したチェコがソ連軍に侵攻される。「二千語宣言」の影響もあり、作家たちは「表現の自由」ということについて議論した。安部は、チェコ事件を人間の「自己表現の拡張」を求めた戦いであるとして、深い感銘を受けたと語る。

しかし、三島は同じ観点を持っていながら、「表現の自由」に対して懐疑的である。「人間性」は解放されれば「破壊性」を持つ非常に危険なもので、政府はその危険から人々を守ってくれる。「言論表現の自由」は「一つの政治秩序」の中において行われるべきで、そこからはみ出そうとするものは、無意識に国家の「保護機能・保障機能」を享受している学生たちくらいであるという。

しかし、「一つの政治秩序」を越えて「言論の自由」を求めるという点においては、安部の主張もまた、学生たちと同じだった。人間は「言葉を用いるすべてのなかに、自分が存在すると考えるようになる^[7]」くらいまで解放されなければならないという主張を見る時、ここでの「言葉」とはもはや、「一つの政治的秩序」には収まらない。国境を越え、個と個をつなぐ性質を持つ、まるで「国際共通語」のような概念なのだ。

「国際共通語」と言うと、安部の父、浅吉がエスペラントの活動家であったことに思い当たる。呉美姪^[4]によれば、浅吉は「満州国の「五族共和」という理想の実現を〈エスペラント〉によって夢見た、一部のリベラルな日本人知識人」の一人だった。こうした父からの影響を、呉は、最晩年の安部の「クレオール」への関心の中に見つけるの

だが、1968年の時点で、それは既に表れていたのではないか。ただ、その共通性は「言葉」の本質」という、もっと細部の方に求められ、その規模は満州よりはるかに大きかった。越境の夢は「人間」と「言語」への強い信頼からなるものでもあった。

5. 「無国籍者」の夢—学生運動

安部が学生運動を語る時、細かな事件などには触れず、常に大ざっぱで抽象的である。まさに世界中どこでも「おきかえ可能」な記号であるかのように語られているのだ。1968年4月のコロンビア大学占拠や、フランスの5月闘争など、学生運動は世界中で同時多発的に起きていたため、安部はこれを「同時代の感覚」の根拠の一つとして考えていたのではないか。従って、日本の学生運動に独自の特色を見ようとはしなかった。高橋和巳は、学生たちの行動の原因は、敗戦後の日本人が「自分達の敗戦経験」を「きっぱり総括しなかったこと」にあるのだと訴えている^[5]。戦後民主主義と憲法に守られてきたと自負する大江は、学生たちの戦後民主主義批判を前に沈黙したし、三島由紀夫は、東大全共闘にむかって、安田講堂立てこもりの際に「天皇という言葉を一言彼等が言えば(略)一緒にやっと思った^[6]」と声をかけた。

いずれも立場は違うものの、日本という国に所属する自分を認めているところは皆、共通している。「無国籍者」を名乗った学生たちや安部のように伝統や歴史一切を否定するという態度を取るものはない。「1968年」は運動の季節であり、高度経済成長期の只中にあり、戦後でもあった。「国家」における歴史や伝統を捨て去ることを訴えることは、その責任から逃れたい人々にとって都合の良い考え方であったとも言えるのではないか。

¹ 「安部公房氏にきく/チェコ問題と人間解放」『読売新聞』（1968年8月29日）

² 「続・内なる辺境」『安部公房全集』（新潮社 1999年）

³ 安部公房・萩原延壽「鎖を解かれた言葉たち」『中央公論』（中央公論社 1968年10月1日）

⁴ 呉美姪 『安部公房の“戦後”—植民地経験と初期テクストをめぐって』（クレイン 2009年）

⁵ 高橋和巳「大学・戦後民主主義・文学」（『逆行の思想』1969年11月18日）

⁶ 東大全学共闘会議駒場共闘焚祭委員会『討論 三島由紀夫 VS 東大全共闘』（新潮社 1969年）

農業において女性が輝くために

—茨城県における農村の活性化とジェンダー—

Women can play active roles In Agriculture

—Revitalization and Gender of The Farm Village In Ibaraki Prefecture—

原科 美香

Mika Harashina

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 現代社会研究専攻 臨床社会学専修

キーワード：農業，農村地域，ジェンダー

Key words : Agriculture, Rural Regions, Gender

1. 目的

本研究は、TPPによる日本農業の状況に危機感を得て、これ以上農業を衰退させないために、農村地域はどのようにあるべきなのかについて着目することから始めた。

TPPに関し、政府により農業再生への発案などがなされているが、日本農業はその存続が難しいといえるだろう。今後も存続可能な農業を目指すために、農村地域はどのようにあるべきなのか現状を把握する必要があるだろう。このように、農産物への影響が懸念される中において、首都圏の食料生産基地の役割を果たし、コメの生産量が多い茨城県を対象とすることにした。

また、農業において兼業化が一般になっており、女性が日常的に農業に携わっているケースも珍しくない。それは農業就業人口における女性の割合の高さからも明らかになっている。特に茨城県では、野菜作において多種にわたる農作物の出荷が見られ、女性の農業者も多い現状となっている。そこで、農家女性に焦点を当て、農村部において女性たちが、どのように農業と関わっているのか調査を行い、農業や農村社会でいかなる役割を果たしているか明らかにしたいと考えた。

そして、調査によって得られたデータをもとに、農家女性の現状を把握し、それをもとに TPPのみならず、すでに衰退し続けている日本農業へ対抗する新たな方法について考察を行う。

2. 方法

本研究では、農家の現状について把握する必要がある。よって、女性出荷者に話を聞き、実際にどのように農業へ関わっているのか、どのような思いを抱えているのかを把握する。その結果をもとに、女性農業者の特徴を把握し、問題点を明らかにした。そこから、女性農業者の活躍により、TPPへ対抗する方法を探る以前に、女性が農業へポジティブに関わることでできない原因を分析していく必要があるのではないかと考えた。

そこで、実際に農村地域に住む女性たちや農家の女性はどのように農業と関わっているのか実態を把握するために調査を行った。この調査は、兼業農家数が多いことから、つくば市、つくばみらい市を対象とした。特に、農業や TPPに関する項目を中心に、今後の農業に女性がどのように関わっていくべきかなど、農家女性の現状を把握するための項目を設けた。

3. 結果

インタビューの結果から、女性たちは自ら積極性を持って農業に取り組んでいるということが分かった。しかし、現実問題として、介護や農村地域特有のジェンダー意識により、積極的に行えない例もあるということが分かった。JA女性部の中核を担う世代 60代の人が、介護で活動や農作業から離れるという現状を踏まえ、平成 17年度の国勢調査のデータから、農業就業人口に占める女性の割合を分析した。その結果、女性部の平均年齢に

あたる 65 歳～69 歳では、女性の就農率は 40% となっており、ピーク時と比較し 19% も減少していることが分かった。しかしながら、調査地域においては、「夫はそとで働き、妻は家庭を守るべきだ」「親の介護は女性がすべきだ」などの伝統的価値観は男女ともに弱いということがわかった。このことから、意識と実態に差があるといえよう。すでに性別役割分業や女性が介護を担わなくてはならないという意識は弱いものとなっている。にもかかわらず、現実がその変化に追い付いていないということであろう。

また、調査を行った地域において女性たちは主体的に農業へ携わっておらず、むしろ農業への参加に対し消極的であった。これは、介護などの要因の他に、きちんとした評価を得ることができないという点も挙げられる。実際に就農者のうち、女性は 41% であるが、女性で土地の名義人となっている割合は 20% である。さらに、農業収入を得る際の口座の名義人が女性となっている場合は 11% であった。

女性就農者に対して、正當に評価をすることの重要性について、農山漁村の女性に関する中長期ビジョンでは、働きに見合った報酬により、女性の働きを目に見えるようにする。つまり自分の名前で社会的に活動し評価される、そして家族経営協定などを通し女性の働きが精神的にも経済的にも認められることを重視している。今回の調査で実際に多くの女性が、今後の農業への携わり方に対し「作業された農作業にだけ従事したい」「農作業が忙しいときだけ手伝いたい」「農作業は行わず、経理等の事務作業に携わりたい」「農作業等、全てに関わりたくない」という消極的な思いを抱いていることが明らかになった。このことから、無関係とは言えないであろう。

しかしながら、このような状況とは反対に、今後女性農業者に対する期待は大きくなっている。女性農業者に対し、61% が「今後、経営者として農業経営方針の決定に携わるべき」と回答している。そのためには、女性が正當な報酬や評価を得られるような環境づくりの一環として、家族経営協定が重要となってくるであろう。しかし、実際には農家や過去農家であっても、家族経営協定を結んでいる例は 4%、知らないという回答が約 80% と認識の低さが明らかになった。

農業に女性が参画することの重要性については、

政府の政策だけではなく、人々の意識からもうかがうことができる。家族経営協定を結び女性が自ら積極性を持ち就農できる環境をつくるのが、今後の農業に新たな活路を与えるであろう。

4. まとめと今後の課題

本研究では、やはり農家の再生にはジェンダーがキーワードであると強調したい。多くの人が、女性も決定権を持ち農業経営に携わるべきだと思っている。そこで、今後は家族経営協定について調査を行いたい。

また、今回の調査において、想以上に深刻な状況となっていたのが、耕作放棄地や土地持ち非農家であることが分かった。本研究では、耕作放棄地や土地持ち非農家についての対応をどうすればよいかという視点から、分析を行うことができなかった。後継者が減っていくなかで、耕作放棄地は日々増加していく。この問題についても積極的に検討を行う必要があるのは明らかだ。そこで、農業経営の法人化について直目し、特に集落営農組合の法人化が有効なのではないかと感じた。

集落単位での法人化が進めば、高齢化で耕作ができない土地を利用することも可能である。さらに、加齢により農作業ができない高齢者も、農作業は若い人に任せ、農地管理などといった作業だけを行うことも可能である。このような経営体のなかでは、高齢者や女性もそれぞれが自分に適した作業を行うことができるはずだ。しかしながら、法人化について現在の現状について分析した結果、家族経営協定と同様に農家に浸透していないことが分かった。だが、農業就業者による高齢化がますます進むなかで、世帯単位で農業を行っていくのが難しくなる日がやってくるであろう。継続可能な農業を目指すためには、このような新たな方法を進展させていく必要がある。今後は、集落営農の法人化について、調査を行い検討する必要がある。

主要参考文献

- [1] 国勢調査報告 平成 17 年度「産業(大分類)、職業(大分類)、年齢(5 歳階級)、男女別 15 歳以上就業者数(雇用者—特掲)」『第 4 巻 茨城県 第 5 表』
- [2] 農林水産省 2013「平成 24 年 食料・農業・農村の動向」『食料・農業・農村白書』第 1 部、第 3 章、第 1 節(1)農業構造の変化 pp.148-149

育児期女性の現状認識とwell-beingに関連する要因

—価値観志向・ソーシャルサポート・育児観の観点から—

Recognition of current situation and factors influencing the Well-being of Women in child rearing
—From the standpoints of Womens' Value orientation, Social support, View of child rearing—

薊 奈保子

Naoko Azami

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 臨床心理学専攻

キーワード：育児期女性，価値観，ウェルビーイング，サポート

Key words : Women in child rearing, Value orientation, Well-being, Support

1. 目的

“ウェルビーイング”は「よい状態」と訳され，“適応”とも関わりの深い概念である。なお育児期女性では，ソーシャルサポートや価値観，育児観がウェルビーイングと関連すると考える。本研究では，上記の3つの概念が育児期女性のウェルビーイングとどのように関連するか明らかにすることを目的として，調査を行う。

2. 方法

(1) 研究 1

保育園を通じて未就学児を育てている女性に質問紙調査を行い，204名の女性を分析対象とした。

質問紙は，育児観尺度(田中ら,2010)，仕事に対する価値観尺度(森永,1999)，ソーシャルサポート尺度(宮武,2007)，母親のウェルビーイング尺度(川村,2013^[1])の4尺度と，フェイスシートと自由記述で構成されていた。

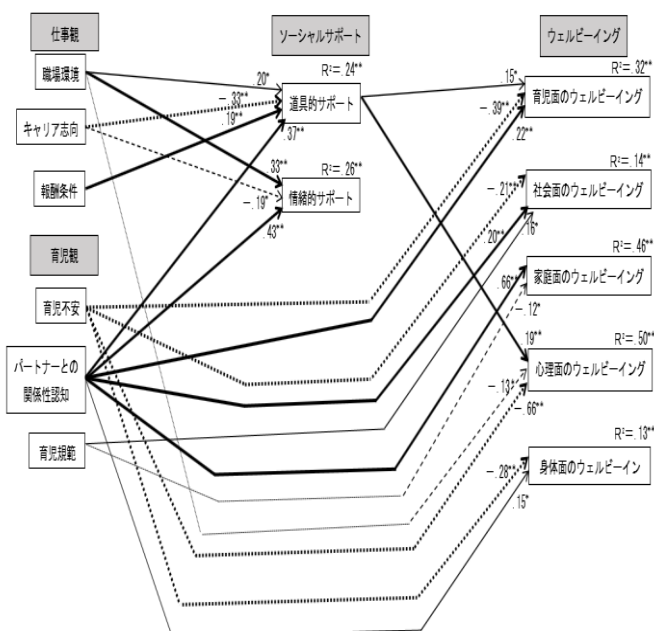
(2) 研究 2

研究 2 では，研究 1 の質問紙では把握することのできなかった，育児期女性の育児不安や困難感の背景にある要因について明らかにし，その要因に作用する支援について検討することを目的としたインタビュー調査を行った。質問紙調査の中で，インタビュー調査協力に同意した女性のうち，連絡のついた10名を対象とした。1名につき60分程度，半構造化の形式でインタビューを実施した。

3. 結果・考察

(1) 研究 1

図 1 より，育児期女性のウェルビーイングは，



実線は正の影響,点線は負の影響をあらわす。

太い線及び** .1%水準で有意の場合を示す。

細い線及び* .5%水準で有意の場合を示す。

図 1 ウェルビーイングに及ぼす，育児観，仕事観，ソーシャルサポートの影響のパス・ダイアグラム

育児不安，パートナーとの関係性認知，道具的・情緒的サポートの4つの影響を受けやすい傾向が示された。その中でも特に育児不安とパートナーとの関係性は，育児期女性のウェルビーイングに大きな影響を与えることが考えられた。

仕事に関する価値観については，女性が育児生活に適応するに従い“育児”“子ども”が自分の中で

の優先事項となるため、ウェルビーイングへの影響が少ないことが示された。

また、従来の研究で従属変数として扱われるウェルビーイングであるが、ウェルビーイングが高まると外界に対する認知もポジティブとなり、逆にウェルビーイングが低くなると外界に対する認知はネガティブになるなど、ウェルビーイングが独立変数として作用する可能性も示唆された。

(2) 研究 2

対象者 10 名の心理面のウェルビーイングを、平均値を境に低群と高群に 5 名ずつ分類した。

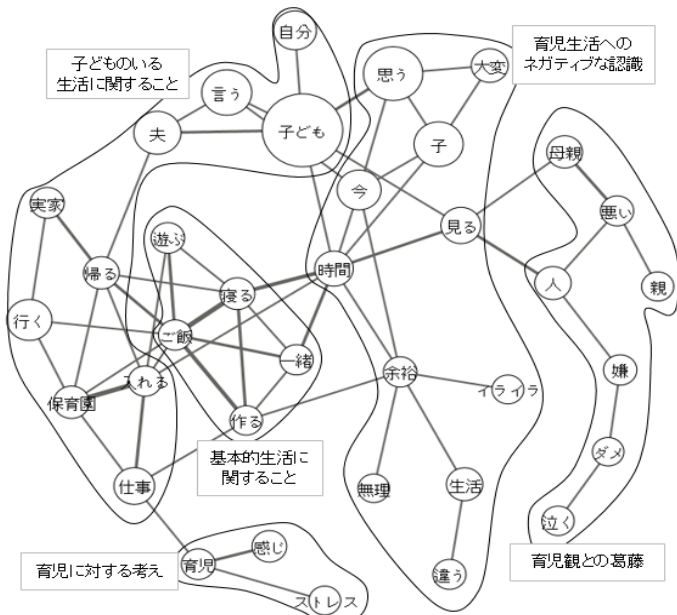


図 2 心理面のウェルビーイング低群の語り

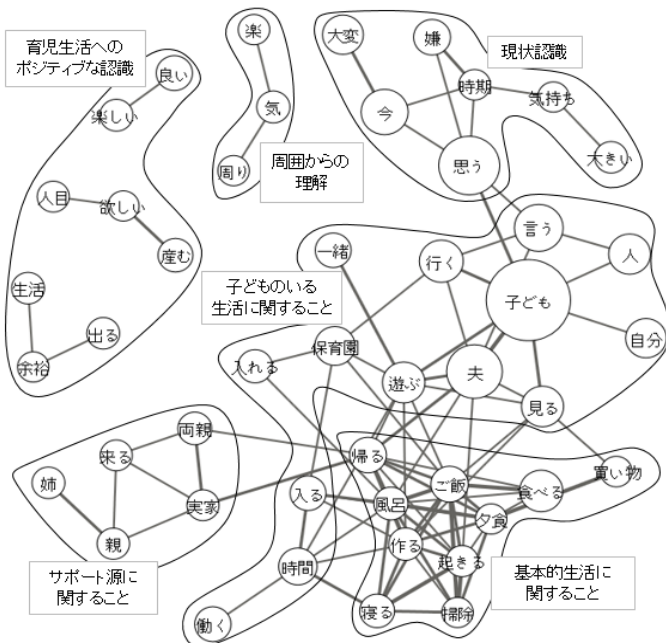


図 3 心理面のウェルビーイング高群の語り

心理面のウェルビーイング低群・高群別のインタビューデータを用い、テキストマイニングによる分析を行った結果(図 2・図 3)、心理面のウェルビーイング低群は、育児に対して「イライラ」、「ストレス」などネガティブな考えを持っていることが明らかとなった。これに対し心理面のウェルビーイング高群は、「大変」と考えつつも「楽しい」、「良い」と考えていることが明らかとなった。さらに同群は、他者からのサポートに対し「もらっている」という感覚を持ち、「楽」と好意的に評価していた。これに対し低群では、サポートを受けていてもそれに対する好意的な語りは見られなかった。低群と高群ではサポートを受けていることへの認識が異なることが示された。

また、自身の持つ育児観と現実との間の葛藤が表現されているのも、心理面のウェルビーイング低群の特徴として読み取れた。さらに、同群は子どもと一緒に遊ぶことを養育義務の 1 つとして考えている可能性が示唆された。

インタビューデータをもとに、心理面のウェルビーイング低群と高群の夫、子ども、育児に対する語りの違いを検討したところ、低群においていずれの項目もネガティブに捉えられやすい傾向が見られた。心理面のウェルビーイング高群は、困難や不安を喚起させる出来事に遭遇したとき、視点を変え、問題をポジティブに考えられる環境を自身で整えることで現状を肯定的に捉える工夫をしていた。これに対し心理面のウェルビーイング低群は視点の切り替えがうまくできず、精神的安定が脅かされやすい様子が見られた。

以上より、育児期女性のウェルビーイング促進には“視点の切り替え”がひとつの要因となると考えられた。研究 1 において、育児不安、パートナーとの関係性認知、ソーシャルサポートが重要であると示されたが、それだけでなく育児期女性自身の物事の捉え方も関係する結果が見られた。

付記 本研究は、大妻女子大学人間生活文化研究所「大学院生研究助成(A)」(DA2601)の助成を受けたものである。

主要参考文献

[1] 川村千恵子 (2013). 乳幼児をもつ母親のウェルビーイング 大阪公立大学共同出版会
 [2] 伊藤正哉・小玉正博 (2005). 自分らしくある感覚(本来感)と自尊感情が well-being に及ぼす影響の検討 教育心理学研究 53(1), 74-85

いじめの4類型といじめ加害者の特徴について

—いじめの「露見性—匿名性」および「直接性—間接性」による4類型—

4 Types of the bullying and characteristic of the bullying assailant

—4 Types by "disclosure-related - anonymity" and "the immediateness - obliqueness" of the bullying—

大嶋 千尋

Chihiro Ooshima

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 臨床心理学専攻

キーワード：いじめ加害者，家庭環境，他者評価

Key words : Bullying assailant, One's family background, Others evaluation

1. 問題と目的

いじめの研究の歴史は、いじめの被害による児童生徒の自殺が社会問題となった 1980 年代から始まった。いじめ被害者や加害者の特徴の研究や集団としていじめを捉えた研究、いじめの実態調査など、研究の視点は様々である。

大嶋 (2013) は、三島 (1997) のいじめにおける攻撃行動の「直接性—間接性」の視点に、いじめが行われる場面の「露見性—匿名性」の視点を加えた 2 軸により、いじめを 4 種類に分類した。その結果を「いじめの 4 類型」としてまとめ、問題児タイプで直接的な攻撃行動の「公の場でのいじめ」、問題児タイプで間接的な攻撃行動の「物理的ないじめ」、優等生タイプで直接的な攻撃行動の「陰でのいじめ」、優等生タイプで間接的な攻撃行動の「関係を利用したいじめ」とした (図 1)。

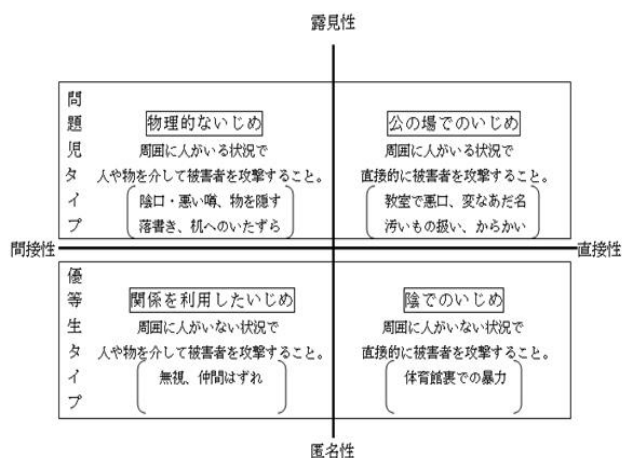


図 1. いじめの 4 類型

本研究では、大嶋 (2013) の「いじめの 4 類型」をもとに、家庭や学校での様子からそれぞれのいじめ加害者の特徴を明らかにすると共に、いじめ加害者の心理を考察することを目的とする。

2. 方法

調査対象者：中学教師 1 名 (縁故法で選出)

質問内容と質問方法：予め、「いじめの 4 類型」から分類毎に、典型的ないじめの具体例を提示し、そのいじめを行っていた生徒を想起してもらい、以下の質問に回答してもらう。

①個人的要因の明確化 (いじめ加害者が周囲からのどのような評価を重視し、自己概念の形成を行うのかを明らかにするために、親以外の身近な大人である先生と、思春期の自己概念の形成に最も影響を受けやすいという同世代の生徒たち、二者からのいじめ加害者についての印象や評価についての質問) ②環境的要因の明確化 (中学生がいじめ加害者になってしまう環境的要因として、いじめ加害者の家庭の様子について、家族構成や親子関係を尋ねる質問)

3. 結果と考察

「公の場でのいじめ」では、2つの事例が得られ、いじめ加害者の共通した特徴がみられた。先生からの評価は生徒 A、B 共に校則違反などの問題行動をする子であり、生徒からの評価は良い印象を抱かれない子であったことが分かった。また、家庭環境については、生徒 A の家庭は父子家庭だが、生徒 B の家庭は特に問題はなく、2つの事例に共通点は見られなかった。しかし、『普通家庭』

とも言い換えられる内容であったため、「公の場でのいじめ」を行ういじめ加害者の家庭環境は、親の養育態度に過干渉や無関心などの偏りがみられない家庭であると考えられる。つまり、「公の場でのいじめ」を行ういじめ加害者は、親の養育態度の偏りがみられない家庭で育ち、問題行動を起こしがちで、生徒たちからも距離を取られてしまうような子という特徴がいえ。これらの家庭環境といじめ加害者の特徴から中村（1990）の自己過程の理論を用いて心理を考察した。すると、周囲から悪い評価を受ける「公の場でのいじめ」を行ういじめ加害者は、自分の現状に満足できていないと考えられるため、人目につくところで自分より弱い立場のいじめ被害者を直接的に攻撃することで、自尊心の高揚を図っていると推察できる。

「陰でのいじめ」では、2つの事例が得られた。しかし、先生からの評価については、生徒Cは中学入学前から問題行動が見られた子、生徒Dはユーモアがあり弱い子を助けるような良い子と対象的な特徴がみられた。同様に、生徒からの評価も、生徒Cは特別に成績が良かったわけでも運動神経が良いわけでもない子という一方で、生徒Dは友達が多くて楽しい子と、2つの事例には相違点がみられた。また、家庭環境についても、生徒Cは父子家庭で子どもに気が回らないという一方で、生徒Dは両親から過剰な愛情を込められていたことがわかり、対象的な家庭環境が挙げられた。従って、「陰でのいじめ」を行ういじめ加害者は、子どもに対して親からの関心が高いか低いかの二極性があり、周囲からの評価が低くて問題行動を起こすような子も、友人が多くて人気者で弱い子を助けるような良い子も存在するといえる。次に、中村（1990）の自己過程の理論をもとに心理について考察すると、「陰でのいじめ」を行ういじめ加害者は、いじめが発覚することで周囲からの評価が今よりも下がり、自尊心の低下を招いてしまうことを恐れるため、このいじめを行うと考える。

「関係を利用したいじめ」では、4つの事例が挙げられた。先生からの評価については、生徒Eは目立たない子、生徒Fは落ち着きのない子、生徒Gは面倒な子、生徒Hは勉強やスポーツができる子と共通点はみられなかった。しかし、生徒からの評価では、生徒Eは嫌がられていたり、生徒Fは好印象を持たれていなかったり、生徒Gは良く思われておらず、生徒Hにおいては逆らえない

感じの子であるという結果となった。つまり、大人からの評価は一貫していないが、生徒からは悪い印象を持たれていたと考えられる。また、家庭環境については、生徒Eと生徒Gに関しては不明だが、生徒Fの家庭は複雑な問題を抱えている一方、生徒Hは特別な問題はなかったということから、共通点はみられなかった。従って、「関係を利用したいじめ」を行ういじめ加害者の特徴は、大人の目に映るいじめ加害者の認識は様々だが、生徒からは近寄り難く、距離を置きたがるような認識であったことが分かった。「関係を利用したいじめ」を行ういじめ加害者の心理については、身近な生徒たちからは近寄り難いと思われる自己の現状に満足することはないと考えられる。そこで、人目につかない場所において、自分の力が発揮でき、自由がある程度許容される仲間内で、その関係性を利用した攻撃行動である「関係を利用したいじめ」を行うと考えられる。

「物理的ないじめ」については、今回は事例を得ることはできなかった。

以上のように、本研究では、「いじめの4類型」をもとにしたいじめ加害者の特徴を明らかにした。しかし、「公の場でのいじめ」を行ういじめ加害者は、直接的な攻撃行動を取る問題児タイプであったが、「陰でのいじめ」、「関係を利用したいじめ」を行ういじめ加害者は、優等生タイプとは限らなかった。

4. 今後の課題

いじめの4類型のうち、「物理的ないじめ」を行ういじめ加害者の事例は想起されなかった。その理由は、筆者の説明不足や時間配分による影響がなかったか、今後の改善点とする。また、「陰でのいじめ」、「関係を利用したいじめ」について優等生タイプとは限らないという結果が得られた。この点について再度検討する必要があると考える。

今後は、倫理的配慮を重視して十分な準備を行い、いじめ加害経験者からお話を伺い、それぞれの特徴と心理過程について検証したいと考える。

5. 主要参考文献

- [1] B. クラーエ 秦一士・湯川進太郎 (2004) 攻撃の心理学 北大路書房
- [2] 三島浩路 (1997). 対人関係能力の低下といじめ 名古屋大学教育學部紀要. 心理学 44 P. 3~9
- [3] 中村陽吉 (1990). 「自己過程」の社会心理学 東京大学出版会

根粒形成における感染シグナル伝達系の解析

Analysis of infection signaling system in the nodulation

川村 景子

Keiko Kawamura

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 人間生活科学専攻 生活環境学専修

キーワード：根粒形成，感染シグナル伝達系，サイトカイニン

Key words : Nodulation, Infection signaling system, Cytokinin

1. 目的

植物の共生で、最もよく研究されているのが、マメ科植物と土壌細菌の根粒菌との関係である。マメ科植物は根粒菌に感染すると根粒と呼ばれる構造体を形成して、根粒菌は空気中の窒素をアンモニウム塩に固定し、植物は窒素源として生育に利用する。反対に、根粒菌は植物から栄養源として有機化合物を受け取る。また、根粒菌とマメ科植物の共生関係には宿主特異性があることが知られている。

本研究では、マメ科植物の中でもミヤコグサ (*Lotus japonicus*) を用いた。根粒形成までの過程としては次のようなものが知られている。マメ科植物において、特異的なフラボノイドが根から分泌される¹⁾。それを根粒菌は受容すると根粒 (Nodulation ; Nod) ファクターを合成・分泌し、植物に働きかけを行う。この Nod ファクターに対する応答には次の様なものが知られている。まず 1 分以内に根毛細胞の細胞膜の脱分極が起こる。Nod ファクターを感受してから 5 分ほどで、根毛の基部の核領域でカルシウムスパイクというカルシウム濃度が周期的に変化する現象がみられる。さらに、15 分ほどで根毛伸長領域において細胞骨格であるアクチンの脱重合が始まり、根毛の先端に集積する。これらの表現型マーカーの時系列に沿って Nod ファクターの情報伝達系モデルが最近、示されている²⁾。

Tirichine らはミヤコグサ菌の感染がないにもかかわらず、ミヤコグサの根粒様構造体を形成する自然突然変異体を分析したところ、植物ホルモンであるサイトカイニンの受容体遺伝子 *LHK1* の過剰発現が関係していることを見出した³⁾。それに

よると、*LHK1* がこの情報伝達系に組み込まれ、この突然変異体は *LHK1* の恒常的な発現によって、下流の遺伝子 *NIN* の活性化を誘導して最終的に根粒用構造体を形成すると考察している。このようにサイトカイニンが根粒形成に関与することは徐々に明らかになってきたが、根粒菌感染に伴ったサイトカイニン合成、蓄積やそれに関する遺伝子についての研究や合成したサイトカイニンを受容する機構の詳細については、未だ知見がほとんど得られていない。本研究では、サイトカイニンに関するこれら未解明である問題を解決するため、①根粒菌の感染に伴う宿主マメ科植物でのサイトカイニン合成遺伝子 (Isopentenylaminotransferase: *IPT*) の発現量の経時的な測定、②合成したサイトカイニンを受容する *LHK1* の感染に伴う発現量の経時的な測定を行った。

2. 方法

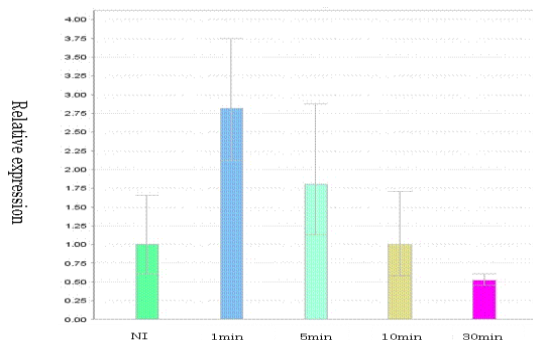
研究材料は、植物: ミヤコグサ (Miyakojima G-20)、根粒菌: ミヤコグサ菌 (*Mesorhizobium loti* MAFF 303099) を用いて行った。研究方法としては、まずミヤコグサの種子を滅菌し 0.7% (w/v) 水寒天プレートに置き、人工気象器にて 3 日間、静置した。発芽後 3 日目のミヤコグサの芽生えを 1.3% (w/v) B&D 滅菌寒天培地に移し替え 7 日間、静置して培養した。継代培養したミヤコグサ菌を 7 日間、培養したミヤコグサの根毛に希釈したミヤコグサ菌を 100 μ l 滴下、感染させた。その後、ミヤコグサ菌をミヤコグサに感染させ一定時間ごとに、その 0.1 g を液体窒素で凍結・破碎し Total RNA を抽出した。抽出した RNA を c-DNA 合成キットおよびサーマルサークルを用いて、c-DNA を合成した。合成した c-DNA 濃度はフロオロメーターを用いて

測定した。合成した各 c-DNA を希釈し、感染後の IPT, LHK1 遺伝子の発現の経時的变化を調べた。PCR 終了後、3%(w/v)アガロースゲルを用い、電気泳動を行った。電気泳動後、Syber Green 溶液で染色し、トランスイルミネーターを用いて観察した。その後、根粒菌の感染を伴う IPT, LHK1 遺伝子の発現を定量するため、リアルタイム RT-PCR(qRT-PCR)の TaqMan-アッセイ法にて測定した。定量法としては、比較定量法である $\Delta\Delta Ct$ 法を用いた。

3. 結果

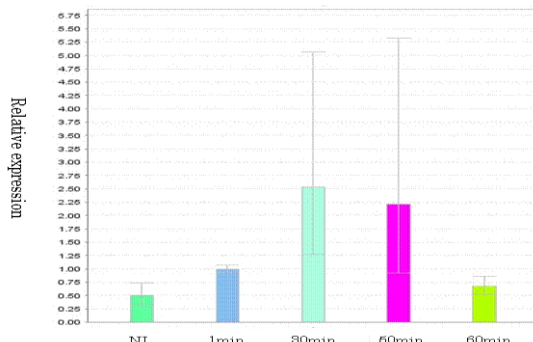
RT-PCR 法を用いた測定より、IPT 遺伝子の発現は感染後 1 分前後にピークがあると推測できるため、感染後 1 分・5 分・10 分・30 分の発現量を qRT-PCR 法で測定した。ミヤコグサ菌感染後、IPT 発現量は 1 分が最大で 5 分・10 分と時間が経過してゆくにつれ値が減少していった (図 1)。根粒形成の初期感染過程における IPT 遺伝子の発現はこのように感染後 1 分が最大と非常に早く行われていることが判明した。

図 1. IPT の発現量の経時的变化



次いで、ミヤコグサ菌の感染に伴う LHK1 遺伝子の発現の経時的变化を感染後 1 分、30 分、50 分、60 分の試料を作成し、定量を行った。その結果、ミヤコグサ菌感染して、30 分後に最も高い LHK1 発現量が定量された (図 2)。30 分が経過すると徐々に発現量が減少していった。

図 2. LHK1 の発現量の経時的变化



4. まとめと今後の課題

本研究では、感染に伴うサイトカニン合成について、まずサイトカニン合成の初発遺伝子である IPT 遺伝子の発現を感染に伴う経時的变化から分析した。その結果、感染後 1 分で発現のピークが見られ、この早い反応時間は Nod ファクターの初期応答において細胞内のアルカリ化が Nod ファクターを感知して、数十秒で起きる^{4,5)}ことが知られており、それに次いでこの現象が誘導されると考えられる。この IPT 遺伝子が根粒菌の感染によって活性化することが、初めて本研究で見出された。それによって、根粒形成においてサイトカニン合成に関するシグナル伝達系も重要な働きをする可能性があることが考察された。次いで、根粒菌の感染に伴って合成されるサイトカニンを受容するサイトカニン受容体遺伝子である LHK1 遺伝子については、感染後 30 分で発現のピークが見られた。これは、IPT の触媒作用で植物のサイトカニンである trans Zeatin の前駆体が形成され、最終的には trans Zeatin が作られていくことが現在考えられている^{6,7)}。このため、サイトカニンを合成するのに 30 分程度かかるためではないかと推測している。今後の課題としては、Nod ファクターシグナリングにおける IPT 遺伝子とその下流にあると考えられるカルシウムスパイクを誘導すると考えられている SymRK 遺伝子との関係や感染に伴う IPT 遺伝子から始まるサイトカニン合成シグナリングや IPT 遺伝子が働いて、合成されるサイトカニン量の定量を行うことで、根粒形成についてサイトカニンの働きをより明確にすることができると考えている。

5. 主要参考文献

- [1] Zuanazzi, J et al.: MPMI 11,784-794(1998)
- [2] Spaink, HP.: Critical Review in Plant Sciences 15,559-582(1996)
- [3] Tirichine, L. Et al.: Science 315,104-107(2007)
- [4] Felle, H.H et al.: Plant J. 10, 295-301(1996)
- [5] Felle, H.H et al.: Plant Physiol. 124, 1373-1380(2000)
- [6] Takei, K et al.: Plant Cell Physiol. 45: 1053 -1062 (2004)
- [7] Takei, K et al.: J. Biol. Chem. 279: 41866-41872(2004)

学習習熟度別学級編成における 高校生の自己受容感と学級適応感の関連性について —横断的・縦断的研究による臨床心理学的考察—

The Relationship between Self-Acceptance and Adjustment of The Classroom
among The High School Students Divided Classroom into Degree of Learning Ability
—The Clinical Psychological Consideration by Cross-Sectional and Longitudinal Study—

小川 響
Kyou Ogawa

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 臨床心理学専攻

キーワード：自己受容，学級適応，環境，集団，自己実現

Key words : Self-Acceptance, Adjustment, Environment, Group, Self-Actualization

1. 目的 適応とは一般に、個人と環境の相互作用を表す概念で、個人と環境との調和と定義づけられており(大久保,2005)、高校生までを対象とした適応感研究の多くは、主に学校への適応感や不適応感に焦点を当てている。それらの従来为学校適応感研究では、適応感を規定する環境的な要因として、重要な他者である友人・親・教師との関係および学業に対する姿勢といった因子が挙げられてきており、それらの因子こそが適応感を規定するものと考えられてきた。そのため、学校適応感はいこれらの環境的要因のもとで測定がなされてきており、友人・親・教師との関係も良好で学業にも積極的に取り組む生徒が最も学校に適応していると考えられてきた。しかし、例えばそれらの要因のうち一部が欠如していたとしても、その全生徒が不適応に陥るとは考えにくい。実際に大久保(2005)は、教師との関係が良好でなくとも学校への適応の問題を抱えていない生徒、学業に積極的でなくとも学校への適応の問題を抱えていない生徒も現に存在することを指摘しており、従来の適応感因子を用いて調査を行った結果、教師因子・学業因子が適応感と全く関係していなかった学校があった。つまり、生徒が適応に際して重要視している側面は個人により異なるということがいえる。このことから大久保(2005)は、学校適応感の規定因は学校ごとに異なりその影響の仕方は学校の特徴を

反映すると主張している。近年においては、学習習熟度別学級編成を展開する教育形態が広がりつつあるが、ここでもまた、そのほとんどの実証的な研究の従属変数は成績面に限られており、態度的側面の研究はいまだ十分でない。昨今ではほとんどの生徒がこの教育形態を経験しているという社会的背景から、学習習熟度別学級という集団に属することで生徒は適応感に関してどのような影響を受けているのか、その環境に所属することで生徒は適応に際してどのような側面を重要視するのか、質的に検討する余地はあると思われる。

適応とは、自分の所属環境が有している“文化”の中で自分にとっての重要な側面をいかに打ち出してゆけるか、つまりその環境の中で自己実現を図れるかということであると考えられる。所属環境の文化はその集団を成している構成員により形作られるものであるが、その文化と自分にとっての重要な側面にズレが生じている場合に、環境との折り合いをつけ適応を促すものが自己受容であると考えられる。このことから適応と自己受容とは密接な関係があると考えられるため、本研究では、学習習熟度別学級編成における高校生の自己受容感と学級適応感の関連性について検証し、現代青年期を生きる高校生の適応傾向を探ることで教育現場における適応支援に役立てることを目的とする。

2. 方法 調査対象者は学習習熟度の程度により

高組・中組・低組の3群に振り分けられた進学高校に在籍する2012年度の入学生260名(男子153名,女子107名)で,発達的な視点を取り入れる目的で,高校生活3年間に渡り同集団を調査対象とした。2012年から毎年9月に質問紙調査を行い,測定尺度には「自己受容測定スケール(SAI)」(宮沢,1987),「青年用適応感尺度」(大久保,2005)を用いた。

3. 結果 各尺度の因子分析,相関分析を行った。その結果,高組では,友人同士の繋がりを大切にするというよりは個人の生き方を大切に,自分の良い面を最大限に活かせるような生き方を試みる事が示唆された。中組では,3年間を通して他2クラスよりも自分に対して自己分析的であり,分相応の生活を試みることが示唆された。最後に低組では,自分にとって誇れるものがある現実に自己価値を置き,その面を打ち出してゆくことを積極的に試みることが示唆された。また,3クラスに共通する発達的な視点として,3年間を通してMaslowの自己実現理論に従って徐々に自己実現に向かってゆくことがクラスでの適応の要因となっていることが示された。加えて,自己受容に関しては,発達と共に自己に対して目を向けられる面が徐々に増えてゆくことが分かり,自己受容できる側面が徐々に増えてゆくことで自己と所属環境とのズレを適応的に処理しやすくなる事が推察された。

4. まとめと今後の課題 生徒の所属環境により適応傾向に特徴があることが明らかにされたことで,適応支援の際の一つの知見として教員へのコンサルテーションやケースマネジメント等に活用できる可能性が示唆されることとなったが,生徒が周囲の環境から適応面に影響を受けることはあっても適応支援の最終地点はどの生徒に関しても同じなのではないだろうか,本研究を進めてゆく過程で考えあがった。それは,適応支援とは生徒が幸せに学校生活を送ることを支えることではないかということである。学校コミュニティにおいては生徒と環境の適合性を最大にする努力をすることがテーマであり,教育現場における教育相談の推進にとっては個人を取り巻く学校コミュニティを重視した取り組みが欠かせない(樺沢,2014)。ただしそれは,“暗黙裡にある適応の形に近付けさせる”のではなく,あくまでも“生徒個々人の目指す適

応の形に近付けさせる”お手伝いをするのが適応支援の在り方なのではないかと思うのである。

とはいえ,生徒個々人の目指す理想の適応の姿に,環境から求められている,集団を成すための理想の姿が全く取り込まれていないのも問題である。Newman&Newman(1984)は,青年期の心理的葛藤を「集団同一性対疎外」としており,青年期において重要な社会集団から包含または排除されることが心理的に重要である以上高校生にとって自らが所属する学級集団との関わりは非常に大きな意味合いを持つと考えられ,集団凝集性から逸脱することはその個人にとって少なからず疎外感となる事が予想される。環境から求められている理想の姿と個々人の中で抱く理想の自己像が異なるにしろ,集団に調和している方が望ましいのは言うまでもない。このため,個人の理想の中に環境から求められている理想の姿が全く取り込まれていない場合はその取り込みが重要となると考えられる。これらのことより,適応支援においては,それぞれの所属集団が目指す理想の適応の形と最低限の折り合いをつけながら,個人の自己実現を共に目指してゆく取り組みが重要であると考えられる。

本研究は,近年目立ちつつある一つの教育形態である学習習熟度別学級編成に焦点を当て,そこに在籍する生徒の自己受容感と学級適応感の関連性について検証したものであったが,類似研究の少なからず本研究結果の一貫性・信頼性については疑問の余地が残った。また,本研究の自己受容の位置づけとして,所属環境から求められている姿と自己像との間でズレが生じた場合に環境との調整を行うものとしたが,実際にはそのような質的なデータが得られたわけではなく,この点で,今後理想自己や現実自己に関する更なる調査も併せて行う必要があると思われる。このため,他の学校においても研究を実施する等,今後繰り返し研究が重ねられることが期待される。

主要参考文献

- 宮沢秀次 1987 青年期の自己受容性の研究 青年心理学研究(1), 2-16
大久保智生 2005 青年の学校への適応感とその規定要因—青年用適応感尺度の作成と学校別の検討— 教育心理学研究, 53, 307-319

心理療法場面における

セラピストの感情コンピテンスの発達過程

About a development process of Emotional Competence of psychotherapists

鈴木 理絵

Rie Suzuki

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 臨床心理学専攻

キーワード：セラピストの発達過程，感情コンピテンスの発達

Key words : Development process of psychotherapists, Development of Emotional Competence

1. 目的

心理療法場面においてセラピスト(以下, TH)は面接場面で様々な感情を抱きながらクライアント(以下, CL)と関わっている. とくに初学者は心理療法がうまくできないことに対して, 不安, 焦り, 劣等感, 無力感, 自己嫌悪などの否定的感情を抱いたり, CL に対して苛立ったり, CL が何を求めているのか分からず困惑したりと, 居心地が悪い体験をしているという指摘がある(山口,2010).

TH が心理療法場面で抱く感情は, 古くから逆転移として研究がなされており, その扱い手順や克服・活用要因が明らかにされている(松木,1996, 遠藤,1997)

熟練者になるほどそのような感情に振り回されることなく, 自身の感情および CL の感情をも理解し, 関係が深まる傾向があるが, そのプロセスについての具体的な知見は少ない. 熟練した TH になるまでの過程を示すことは, 初心者にとって, 現実的な目標設定の一助となるだろう.

本研究では TH 自身の感情, および CL の感情, そして TH と CL の二者間に流れる感情を総合的に考察できる概念として, 感情コンピテンスを取り上げる.

感情コンピテンスとは, 感情が引き出される社会的相互作用の中における自己効力感の現れと定義されている(Saarni,1999).

また, 感情コンピテンスとは①自分の感情に気づく能力, ②他者の感情を識別し理解する能力, ③感情とその表出に関する語彙を使用する能力, ④共感的な関わりのための能力, ⑤内的主観的感

情と外的感情表出を区別する能力, ⑥嫌な感情や苦痛な状況に適応的に対処する能力, ⑦人間関係の中での感情コミュニケーションへの気づきの能力, ⑧感情の自己効力感の 8 つのスキルから構成されている.

本研究は, TH の発達過程のなかでも「心理療法場面で生じる感情」に焦点を当て, 逆転移や心理療法場面で抱く感情を, 感情コンピテンスの視点から捉え, TH において感情コンピテンスがどのように発達していくのかを, 探索的に明らかにすることを目的とする.

2. 方法

臨床心理士 16 名にインタビュー調査を実施した.

インタビュー調査前に「大学院在学中のケース」, 「資格取得後 1~2 年のケース」, 「最近 1~2 年のケース」において, 「CL や TH の感情が喚起されることの多かったケース」をそれぞれ想起してもらい, 調査用紙に記入を求めた.

調査用紙には①それはどのような感情でしたか, ②CL の感情をどのようなことを手掛かりに認識していますか, ③セッション中の感情を言葉にできた時はどのような時ですか, ④CL に共感的になれた時はどのような時ですか, ⑤自身が抱いている感情と表出すべき感情が異なる場合にどのように対応していましたか, ⑥セッション中, 嫌な思いをした際はどのようにしていましたか, ⑦この特定の CL や状態だからこそ抱く感情や, その伝え方・関わり方がありましたか?それはどのよう

な体験でしたか、⑧この CL との体験についてどのように捉えていましたか、⑨スーパーヴィジョン(以下、SV)での体験はどのようなものでしたか、の 9 項目を記載した。①～⑧は感情コンピテンスのそれぞれのスキルに対応する項目であり、⑨SV の体験について尋ねる項目であった。

インタビューの際、対象者に許可を得た後、IC レコーダーを用いて録音した。調査に要した時間は 2 時間程度であった。

すべてのインタビュー内容の逐語記録を作成し、その後「感情コンピテンスのスキルがどのように現れているか・どのように発達しているか」という視点から、得られたデータを Strauss & Corbin (1990)に基づくグラウンデッド・セオリー・アプローチ(以下、GTA)により分析を行った。

3. 結果と考察

分析の結果、全部で 10 カテゴリーが生成された。それぞれのカテゴリーの特徴と、逐語記録から示唆されるエピソードの時系列を対応させて流れを追うと、この過程は四段階に分けることができる。

第一段階は『不全感』、『上手く頼れない』、『向き合えない』、『CL に巻き込まれそうになる』の 5 カテゴリーである。

第二段階は『どうにかして対処』、『救われる SV』の 2 カテゴリーである。

第三段階は『感情に触れる』、『関係の深まり』、『二者関係からの理解』の 3 カテゴリーである。

第四段階は『感情自己効力感の向上』である。全体の流れを図 1 に示す。図中の①～⑧の数字は、感情コンピテンスのスキル 1～8 を示している。

結果より、TH は『不全感』、『上手く頼れない』、『向き合えない』、『CL に巻き込まれそうになる』状態から、『どうにかして対処』し、『救われる SV』を経験して CL および TH 自身の『感情に触れる』ことができ、CL との『関係の深まり』を得て、『二者関係からの理解』の視点も得られるようになる。そして『感情自己効力感の向上』がなされていくということが明らかとなった。

また、第一段階～第四段階という流れはあるものの、段階は上下すると思われる。例えば、初任者がある CL との心理療法場面において第四段階へ至ったとしても、他の CL に出会えば再び第一段階へ至る場合や、第四段階へ至った後に心理療法の進行によって CL との関係が変化することで、他の段階へ至る場合である。これは熟練者の場合

でも同じことが起こると考えられる。しかし、その段階の上下の幅は臨床経験を積むごとに狭くなっていくだろう。この動きは図中の点線の矢印で示されている。よってこれらの段階は円環的であると考えられる。

また、TH は『救われる SV』を体験し、自身でも『感情に触れる』ことや、『関係の深まり』、『二者関係からの理解』を幾度も経験することで、心理療法場面の展開を一まとめにした知識表現が形成され、また、CL と TH の相互作用パターンが蓄積され、心理療法場面における感情の SCRIPT が形成される。これが要因となり、感情コンピテンスは発達していくと考えられる。

更に、SV を受けることにより、自分自身のことや、自分の感情、自身の心理療法場面を俯瞰して眺める視点である心理療法場面へのメタ認知や、ネガティブな感情を受け入れられるという感情に対する感情の変容、つまりメタ感情の変容によって感情コンピテンスの発達が促されると考えられる。

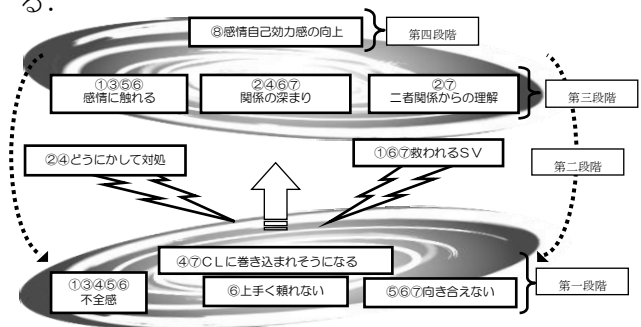


図 1. セラピストの感情コンピテンスの発達過程

4. 今後の課題

感情コンピテンスの発達を促す要因については未だ推測が多く、再度検討する必要がある。その要因が明らかになれば、今後の TH の発達に貢献できる視点を示唆することが出来るだろう。

主要参考文献

- [1] Saarni, C. (1999). *The Development of Emotional Competence*. New York : The Guilford Press.
- [2] 山口裕也(2010). 初心者セラピストにおける「居心地悪さ体験」の探索的研究—内容と変化のきっかけに着目して— 弘前大学大学院教育学研究科心理臨床相談室紀要, 7, 19-27.

日中知識人における死生観の構築

—三島由紀夫と馮友蘭を例にして—

Building the outlook on life and death of Japanese and Chinese scholars

—With a focus on Yukio Mishima and Feng Youlan—

杜 頤函

Yihan Du

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 言語文化学専攻 国際文化専修

キーワード：死生観，儒教，武士道，外来文化，固有文化

Key words : The outlook on life and death, Confucianism, Bushido, Foreign culture, Inherent cultural

1. 目的

死生という問題は人類が意識を持って以来の重要な問題であり、人類全体が直面する回避できない問題である。これは自身の有限性を知るという前提で、どのように有限を理解するかという生命に対する態度を示すものである。

また、死生観は、その人物の属する社会の文化によって決定される部分が多い。文化が長い間をかけて人々の心の中において如何に生きるべきか、またはいかに死すべきかの考え方を育成するのである。

私は中国生まれ中国育ち、幼い時から中国の文化伝統の薫陶を受けていた。大学を卒業して日本に留学してきてから、日本の文化に強い関心を持つようになった。生活のなかにおける思想交流や文化衝突に刺激され、私は徐々に考え始めたのは、違う国と文化の元に生きる人々、とくに高等教育を受けたことのあるエリート知識人が死生の問題に対して一体どう考えているのか、違いがあるなら、どうが違うのか。そして、その違いの発生原因にはどんなものがあるのかということである。もちろん、すべての日本人や中国人の死生観を一度に総括することは不可能である。そのために、ここでは二人の比較が可能な人物を例として取り上げることにした—こうして中国の哲学者馮友蘭と日本の作家三島由紀夫が私の研究対象として浮かび上がってきたのである。

私にとっては、この二人に対する比較研究は、同時に日中文化交流を促進する効果もあると考え

ている。中国では、歴史的な原因で、三島由紀夫についての研究には一定の偏りのあるものが多い。多くの研究はただひたすら三島を軍国主義の道徳主義者として論断し、三島の血を好む死生の理念を強調しがちである。しかし、それは一部は誤解もある。一方日本では、中国学術史における重要な人物である馮友蘭についての研究はほとんどない。これも日本の中国文化研究者にとってはやはり残念なことであろうと思う。従って、この研究を通じて、今後の日中文化交流や日中学術交流に、多少なりとも貢献することができれば幸いに思う。

2. 方法

中国と日本は、異なった歴史や文化の影響を受けて、異なった死生観を形成してきた。故に本論文は研究の進め方として、二人の死生観を考察する前に、まず両国固有の伝統的な死生観を分析してみる。具体的にはここで二人に甚大な影響を与えた中国の儒学と日本の武士道をその研究の対象に選ぶ。この伝統的な死生観をまず捉え、後に、一個人としての二人がそれぞれの文化環境の下で、形成された異なる死生観を検討する。こうした比較分析をすることによって、二人の死生観の特徴が一層理解できるようになるだろうと思う。こうして二人の死生観の差異の深層的原因を見出すことが出来るかもしれない。

この二者を研究の対象とする理由にはさらに次のようなものもある。

まず、この二者が一定の程度においてそれぞれ

の国の文化を体現した人物である。馮友蘭は現代中国の代表的な儒学者であり教育者である。「現代新儒家」と呼ばれる一人である。一方三島由紀夫は、有名な小説家であり、脚本家である。戦後日本の文学家の1人である。そして、後者は葉隠武士道の大ファンでもある。この二人はそれぞれ儒学の学説と武士道の学説の崇拝者と伝承者であり、それぞれ中国と日本の伝統思想を受け継いだ代表的な人物であるといえる。

さらに、私は二人のそれぞれの人生の重要な時期における生と死に対する選択が典型的であると指摘したい。馮友蘭は文化大革命の中で迫害を受け、恥らいを忍耐して生を求めた過去がある。一方、三島由紀夫は自殺の方式で一生を終りにした。このような鮮明な対比は、この論文の問題提起の解明に役立つものと思われる。

最後に、この二人はほぼ同じ時代に生きた人物であるので、比較の対象として選ぶのがふさわしい。馮友蘭は1895年に生まれ、1990年に亡くなる。三島由紀夫は1925年に生まれ、1970年に自死する。彼らは同じ時代に生き、世界範囲内での同時代というものを共有している部分があると言える。

本研究の構成は以下のように考えられている。まず、各自の伝統的な文化環境の下で、馮友蘭と三島由紀夫の死生観について、別別に論じてみる。そして、二人の死生観の形成要因を時期ごとに探る。具体的には二つの部分に分ける。第一部分は、成年以前の家庭環境と社会環境の二人に与えた影響を述べる。第二部分は、主に成人後の経験のそれぞれの死生観に対する影響を検討する。第二部分では、二人の外来文化の吸収の様相を重点的に検討する。

3. 結論

研究の結果、馮友蘭の死生観については、私は彼が生に対しては認め、死に対しては超えると考えることが分かった。馮友蘭が「理」、「気」、「道体」、「大全」という4つの概念に基づいて自分の人生哲学システムを構築した。そしてその著書『新原人』の最後の章では、彼は専ら人生の究極的問題を論じた。それは即ち生と死の問題である。馮友蘭は生と死について、非常に独特な認識を有している。彼は生と死の意義は人の精神的な領域とつながっていると、異なる精神にいる人間は生

と死の認識も自ずから異なると考えている。この認識によってかれは有名な「生死境界学説」システムを構築している。

三島由紀夫の死生観には、生の賛美と死の渴望という特徴があると考えられる。三島は日本の近代文学史上最も傑出した代表的な作家の一人である。文学や芸術分野での成果が豊富だけではなく、美学の世界にも同じく人に感嘆させるほどの成果を有している。彼は日本本土文化の薫陶を受けるのみならず、西洋文化からの影響もたつぷりと受けている。故にその死生観には、生命に対する矛盾性を帯びており、そしてこの矛盾性は彼の文学作品によく現されている。

二人は「死」の理解に対しても、特に大きな違いを示している。馮友蘭は「死」に対しては、まず、退避の態度を取り、心の中では死は認めたくないし、直面したくない。故に、精神の存在を通じて、死の制限を超えることを希望する。三島由紀夫は、「死」の問題から回避しないどころか、むしろ「死」に対して一種の憧れさえ持っている。彼は死はとても美しいことであると思う。

第四章では、私は二人の死生観の特徴を形成する原因を考察した上に、そして、次のような発見を得ることが出来た。それは、二人の思想家は、幼少期は国全体の大環境や一般的な文化や思想に影響されて成長を遂げたが、成年後、彼らはそれぞれ独自の人生を経験し、とくに外来文化と固有文化との衝突を体験することによって、徐々に独特な思想と思惟を持つようになったということである。

主要参考文献

- [1] 馮友蘭 『三松堂全集』 河南人民出版社 2001年
- [2] 馮友蘭 『三松堂自序』 河南人民出版社 2000年
- [3] 馮友蘭 『中国哲学簡史』 北京大学出版社 1996年
- [4] 三島由紀夫 『葉隠入門』 新潮社 1967年
- [5] 三島由紀夫 『仮面の告白 筑摩現代文学大系 68 三島由紀夫集』 筑摩書房 1981年
- [6] 三島由紀夫 『金閣寺』 筑摩書房 1981年
- [7] ヘンリー・スコット著 徳岡孝夫訳 『三島由紀夫：死と真実』 ダイヤモンド社 1986年

理想自己と現実自己の差異と自己注目が劣等感に与える影響

The effects of ideal-real self discrepancy and self-focus on inferiority feeling

中村 純子

Junko Nakamura

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 臨床心理学専攻

キーワード：理想自己と現実自己の差異，自己注目，劣等感

Key words : ideal-real self, self-focus, inferiority feeling

1. 目的

“青年期は他の時期に比べ劣等感が強まる”（返田，1986）と言われるように，自己概念が不明確な青年は自己認識の行動を多くとり（高田，1992，1994），その過程で他者や理想自己と，現在の自己を比較し，劣等感を感じる（高田，1999；関，1981）．特に青年期の理想自己とは，自己実現への期待や積極的な態度が内包され（水間，1998），青年にとって重要視される概念（北村，1962）であり，青年が自己実現を目指す限り，理想自己と現実自己の差による劣等感はずっと感じられるだろう．劣等感にはその後の人格形成に向かう動機づけとなる肯定的な側面がある（e.g., 加藤，1977）一方，一般学生の 44.8% が自己嫌悪や劣等感から自殺を考えたことがあるという調査結果（佐藤・田中，1989）から，青年にとって劣等感とは苦痛な感情であることも伺える．従って青年が具体的に対処可能であるという視点を踏まえ，劣等感の上昇や低下をもたらす要因を検討することは，青年の適応において有用であろう．

近年の抑うつ治療では，その認知的要因の修正ではなく，抑うつに影響を与える注意操作を調整するという観点からアプローチが行われている

（久本，2008）．その一貫として，坂本（1997）は“自己注目と抑うつの 3 段階モデル”（以下，3 段階モデル）を提唱し，抑うつの発生をもたらす認知的要因（認知命題）が自己注目（認知操作）によって，ネガティブな認知として意識化され（認知結果），それに伴って抑うつが生起する点と，自己注目によって抑うつが維持される点を含めた 3 段階の過程によって示した．このモデル同様に，理想自己と現実自己（認知命題）に注意を向け、

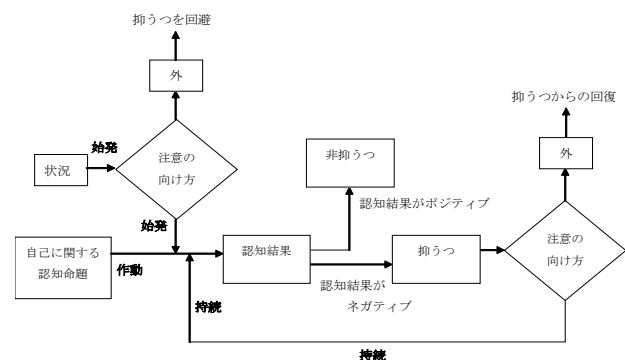


Figure 1 自己注目と抑うつの 3 段階モデル
（坂本（1997）を改変）

不一致が意識される（認知結果）ことに伴い劣等感が生起する心理過程が予測された．さらに自己注目には，自己理解や精神的健康に寄与する機能的な自己注目である「省察」と，抑うつや性格 5 因子論の神経症傾向と関連する非機能的な自己注目である「反芻」の 2 側面が仮定され（Trapnell & Campbell, 1999），このような自己注目の差が劣等感の高低にも影響を与えるとも考えられた．そこで，本研究では 3 段階モデルを援用し，理想自己と現実自己の差異，反芻・省察によって劣等感が有意に影響を受ける点や，さらに高野・丹野（2009）による理想自己と現実自己の差異は自己注目の増大や，反芻と関連するという指摘（Smith, Ingram, & Roth, 1985 ; Carver & Scheier, 1990）から，差異を認知したのち反芻・省察も生起し，差異が反芻・省察を媒介して劣等感に影響を与えるという，媒介効果についても検証することを目的とした．

青年期において，理想自己や現実自己を調整し，劣等感の低下または克服を招くことは容易ではな

いだろう。そこで注意という観点から劣等感の高低を検討することで、青年が実行しうる劣等感対処の具体的な方策となることが予測された。

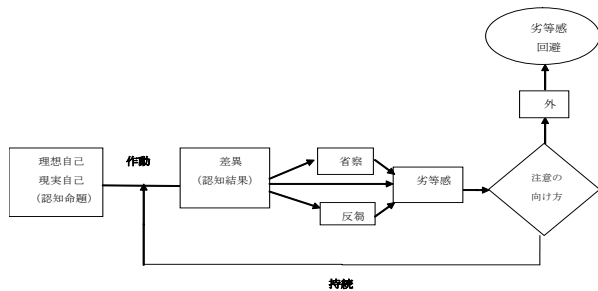


Figure2 本研究における心理過程モデル (坂本 (1997) を改変)

2. 方法

都内大学に在籍する大学生 338 名を対象として質問紙を配布し、回答に不備のなかった 278 名 (男性 57 名, 女性 221 名) を分析に使用した。使用尺度は (1) 理想自己と現実自己の差異: 「劣等感を感じる領域」を示した, 高坂 (2008) による劣等感尺度の項目を改変して使用した。 (2) 反芻・省察: Trapnell & Campbell (1999) による Rumination-Reflection Questionnaire の日本語版 (高野・丹野, 2008) を使用した。 (3) 劣等感: Janis & Field (1959) による自尊感情尺度の日本語版 (遠藤, 1992) 内の「劣等感」因子を使用した。

3. 結果

重回帰分析の繰り返しによるパス解析を行った。その結果, 以下の図に示す結果となった。

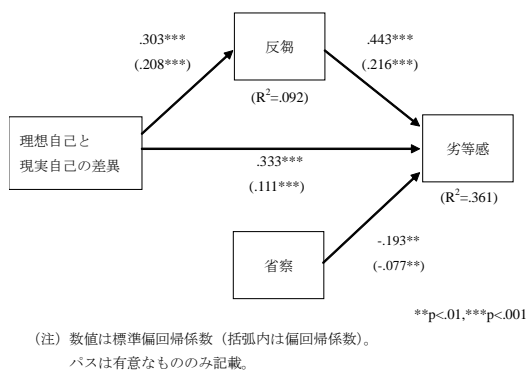


Figure3 理想自己と現実自己の差異, 自己注目が劣等感に与える影響

劣等感に対し, 理想自己と現実自己の差異のみならず, 反芻が有意な正の影響を与え, 省察が有意な負の影響を与えることが示唆された。さらに

反芻は, 理想自己と現実自己の差異を有意に媒介し, 劣等感に影響を与えることが示された (sobel's $Z=4.336 p<.05$)。また省察は理想自己と現実自己の差異を媒介せず, 独立して劣等感に負の影響を与えることが示された。さらに反芻・省察を平均値より高群・低群に分け, 交互作用を検討した結果, 反芻低群においては省察が低い者において劣等感が高く, 反芻高群では省察の高低は劣等感との関連を示さなかった。さらに省察の高低に関わらず, 反芻が高いことで劣等感も高いという結果が示された。

4. 考察

青年にとって, 理想自己と現実自己の差異はそれだけでも劣等感に影響を与えるが, さらに反芻も劣等感に影響を与えることが示された。特に反芻傾向の高い者は, 理想自己と現実自己の差異によって, 劣等感のみならず反芻も生起し, 差異と反芻の 2 方向から影響を受けることが示唆された。従って反芻傾向の高い青年においては, 自己への注目自体を回避する“気晴らし” (坂本, 1997) が劣等感対処に有効であると言える。また省察が独立して劣等感に負の影響を与えることから, 省察的な自己注目を高めていくことで劣等感の対処手段とすることも可能であろう。さらに反芻・省察の交互作用から, 省察の高低には関わらず, 反芻が高いことが劣等感の高さと関連することが示唆された。従って反芻は高めずに, 省察のみを高めるという組み合わせが, 一番劣等感を低く抑える可能性が考えられた。しかし課題点として, 反芻を回避する対処は挙げられるものの, 省察的な自己注目をいかに行うかについての具体性は乏しいと言える。今後, 省察に対しては具体的な実践を見越した検討が期待される。

主要参考文献

- [1]高田利武 (1999). 日常事態における社会的比較と文化的自己観—横断資料による発達の検討—
- [2]坂本真士 (1997). 自己注目と抑うつ—社会心理学
- [3]Trapnell & Campbell(1999). Private self-consciousness and Five-Factor Model of personality: Distinguishing rumination from reflection.
- [4]高野慶輔・丹野義彦 (2009). 抑うつと私的自己意識の 2 側面に関する縦断的研究

臨床心理士が喪失体験から回復するプロセスの研究

Study of the process that clinical psychologists recover from loss experiences

西垣 綾峰

Ayane Nishigaki

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 臨床心理学専攻

キーワード：臨床心理士，喪失体験，回復プロセス，緩和ケア

Key words : Clinical psychologist, Loss experience, Recovery process, Palliative care

1. 問題

死別研究は Freud から始まり，現在も彼の提唱したモーニングワークなど，様々な喪失から回復に至るまでの段階モデルが挙げられている。

死，すなわち自分自身の喪失に臨む際の心理に関して，Ross(1969；鈴木訳 2001)は，末期がん患者にインタビューを行い，自身の死を受容していくまでの5段階モデル(①否認，②怒り，③取引，④抑うつ，⑤受容)を提唱した。このモデルは，末期患者の心理過程の基本的な流れであるが，現代の高度化した医療は，末期治療を長期化し，Ross(1969 - ；鈴木訳 2001)の段階には無い「新たな過程(New Grief)」(Okun&Nowinski,2011)がみられるようになった。このモデルは，主に末期医療を受けている患者の家族のインタビューから，新たな悲嘆の1つの指標として，5段階モデル(①危機，②結束，③激変，④決断，⑤再生)を提唱したものである。

また，がんなどの死をめぐる喪失体験については，回復促進要因や成長促進要因などが挙げられ，モデルの各段階を越えることで，人間的成長の可能性(Tedeschi&Calhoun,2004)も示唆されている。しかし，段階モデルでは，過去から現在までの間に様々な対象者(死にゆく人や遺族，看護師)の喪失体験について研究されてきたが，患者を喪失した臨床心理士に関する研究は，未見である。

2. 目的

本研究では，自身の患者を常に亡くすという体験が伴う緩和ケア領域の臨床心理士に焦点をあて，死別前から死別後にかけてどのような心の対処のプロセスをたどっていくのかという点を探索的に

検討し，臨床心理士が喪失体験から回復するプロセスの仮説モデルを生成することを目的とする。

3. 方法

緩和ケアや病院臨床に携わる臨床心理士(4名)を対象として，回復プロセスに関する半構造化面接法によるインタビューを約90分間行った。インタビューは，①インタビューの周辺情報，②患者の情報，③患者との出会いから死別までのプロセス，④喪失後の対処法，⑤現在の状態，⑥職場内外でのサポート体制，⑦一般的な死別と職業的な死別の違い，に関して尋ねた。なお，倫理的配慮として，Perks(1995)が提示した「遺族を対象とした調査で満たすべき倫理的基準のチェックリスト」をもとにインタビュー内容や方法を決定した。

分析は，修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ(木下1997)を援用した。分析手順として，まず，研究テーマの設定を行い，4名の回復プロセスに関連する記述に繰り返し目を通し，分析ワークシートの作成を行った。分析ワークシートでは，発話例と，発話から得られる概念名，定義などを筆者の問題意識に沿って生成した。

また，喪失体験からの回復のプロセスについて，緩和ケア領域における臨床活動の時間軸を考慮して，「出会いの段階」「関わりの進展」「死別前」

「死別後」「回復の段階」と5つに分類し，どの時期にこういった出来事・関わりが生じ，臨床心理士の心理面に影響を与えているのかを明らかにした。

4. 結果と考察

13個のカテゴリー(以下に【】で示す)が生成された。各カテゴリーを以下の各段階に沿って考察

する。

出会いの段階とは、臨床心理士が患者と出会う以前、すなわち心理的支援の依頼を受ける場面から、患者と対面して関わりを持ち始める段階を指している。

まず臨床心理士は、【患者の事前情報や関わった際の見立てを統合しながら方針を得る】。その中で、患者のニーズの把握を行い、身体面も含め、予後を踏まえて一歩先を見通すことで(長友,2008)、患者に限られた時間を有効に過ごすための関わりができると考えられる。

関わりの進展の段階から臨床心理士と患者との関係性の中では、回復促進要因と回復抑制要因の両者が生じることが示唆された。

関わりの進展の段階では、【患者との関係性ができあがる瞬間】や【患者の精神的な健康さによって臨床心理士が支えられる体験】といった肯定的な体験が見出された。特に【患者の精神的な健康さによって臨床心理士が支えられる体験】は、「(関わりの中で)ギフトをくれる人がいる。そういう人に支えられて仕事をしている気がする」の発言のように、患者に臨床心理士としての関わりを保障してもらい、患者に肯定的な感情を抱く体験が今後の原動力であり、回復促進要因となっていることが分かる。しかし、これらの回復促進要因は、患者への思い入れを強め、【職業役割を越えた個人的感情】が生じ、臨床心理士(役割)と個人(個人的感情)が揺れることによる葛藤が起こり【臨床心理士としての課題が生じる】。

さらに、死別前の段階に至ると、緩和ケア特有の【枠のゆるさ(心理的距離の取りにくさ)による困難感】や【死別前の患者の状態を認知する】などの事態の悪化により、患者に対して「何とかして助けてあげたい」と【職業役割を越えた個人的感情】が生じる。しかし、死別前の段階において、臨床心理士は目に見える形で患者を支援することが難しく、【臨床心理士としての専門性の限界と無力感】を感じるようである。

つまり、患者との肯定的体験(【関係性ができあがる瞬間】【患者の精神的な健康さによって支えられる体験】)は一側面的にみれば、回復促進要因として考えられるものの、もう一方では個人的な思い入れを強めるため、回復抑制要因ともなりうると言える。

死別後の段階において、臨床心理士は遺族にみ

られる悲嘆反応と同様に【一般にみられる悲嘆反応】がみられたが、比較的短期間のうちに悲嘆反応を示し、モーニングワークを行っていた。そういった段階を踏み、ケース記録を書くといった【セルフケア】を行い、職場内外のケース検討会などの【サポート資源を活用する】。このように、臨床心理士は、モーニングワークや体験の整理など、自らのケアを積極的に行っていた。

回復の段階において、臨床心理士は、【自分自身の未整理な部分(未整理な感情)を追求し続ける】のような特長を示す。これは、患者との関わりの中で生じた個人的な感情の課題や臨床心理士として未整理な職業的課題を追求・内省する姿勢である。そこには、自己分析を深めていくことや自分自身の関わりでの課題解決に向けて動くことを行い、その結果として自己理解の深まりに至る様子がみられた。この一連の臨床心理士の取り組みにより、【自分の関わりに対するリフレーミング】が行われ、亡くなった患者との心理面接に肯定的側面があったことを実感していた。

5. まとめ

ケース検討と内省の2つの柱からなる積極的なモーニングワークこそが、喪失体験からの回復プロセスの中核となると言える。このプロセスを支えているのが、患者との肯定的な関わりであった。

その結果、喪失体験からの回復のみならず【臨床心理士としての成長】に繋げ、次のケースに活かすことが分かった。つまり、臨床心理士は患者を支えるのみならず、時には患者に支えられる経験をも原動力として、緩和ケアで日々の喪失体験に直面しながらも、臨床に励んでいるのである。

6. 付記

本研究は平成26年7月4日付で大妻女子大学生命科学研究倫理委員会の審査を受け、承認を得ている。(受付番号26-006)。

また、本学の人間生活文化研究所平成26年度大学院生研究助成(A)(DA2614)より研究助成を受けて行った。

7. 引用文献

小此木啓吾 (1997). 対象喪失とモーニングワーク 松井豊編著 悲嘆の心理 サイエンス社 pp.113-134.

子どものレジリエンス

—プレイセラピーの過程から—

Resilience in Childhood
—From a process of play therapy—

九間 早和子

Sawako Kuma

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 臨床心理学専攻

キーワード：レジリエンス，適応過程，プレイセラピー

Key words : Resilience, Adaptive process, Play therapy

1. 目的

レジリエンスとは、困難で脅威的な状況に曝されることで、一時的に心理的不健康状態に陥っても、それを乗り越え、うまく適応していく過程・結果や能力のことをいうが（小塩他，2002），構成概念であるため，捉える視点は研究者によって様々である。個人の心理的特性に注目した研究は多々なされているが，レジリエンスの過程について時間軸を考慮して行う研究は筆者が見る限り見当たらない。

本研究では，臨床実践であるプレイセラピー過程をレジリエンス要因の変化として分析することで，レジリエンスの過程を捉えることを目的とする。

この研究を遂行するためにレジリエンスを『困難な状況を経験し，陥った不適応状態を一時的なものとして乗り越え，適応していく過程』と定義し，小塩（2012）が仮定したレジリエンスの過程概念図を参考に図 1 のような操作的仮説を用いる。

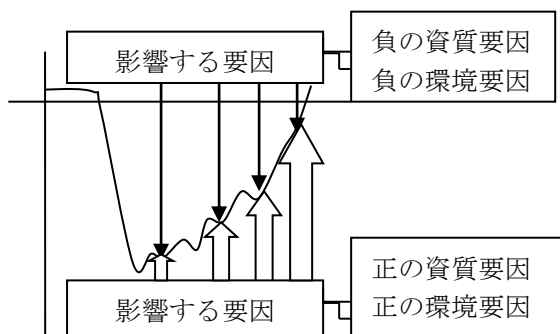


図 1. レジリエンス過程の操作的概念図

図 1 にある「影響する要因」に「正の要因」と「負の要因」を仮定する。「負の要因」には個人の適応状態を悪くさせる負の個人要因と負の環境要因が含まれているとする。「正の要因」とは，個人の適応状態を良くする要因であり，回復過程を支える個人要因と個人を支える環境要因が含まれているとする。また，環境要因には物理的環境と対人的環境を想定する。レジリエンス過程は図 1 の矢印の力関係で変化するものとし，その変化曲線をレジリエンス曲線とする。負の要因が強いと，正の要因が押し込まれて適応状態は下がってしまい，正の要因を強くして負の要因を押し上げると適応状態は上がると仮定する。そのことで負の要因から受ける影響は緩和され，レジリエンス曲線の波形は負の要因ベクトルと正の要因ベクトルの力関係の結果であるとする。そして，困難な状況に遭遇し適応状態が下がってから，ベクトルの力関係が変化し，適応状態にまでレジリエンス曲線が上昇するまでをレジリエンス過程であるとする。このように仮定することで，レジリエンス過程の途中で影響する要因を具体的に分析することが可能になるのではないかと考えている。

2. 方法

分析対象とした臨床実践は，筆者が実習において担当した男児 A 君（当時 8 歳）とのプレイセラピー全 29 回分である。レジリエンス過程に影響を及ぼしたと考えられる正の個人要因・負の個人要因と正の環境要因・負の環境要因（環境要因は対人的要因と物理的要因に分け，対人的要因はセラ

ピスト対応とした) ごとに分類した。そして分類した要因を個人要因については平野 (2010) のレジリエンス要因分類に、環境要因の対人的要因についてはプレイセラピーの理念としてあげたアクスラインの 8 原則に照合して分類し、整理した。

3. 結果

A 君の遊びには大きな変化が見られ、日常生活においても良い報告が得られていることから、プレイセラピーの効果が見いだされたと言える。このプレイセラピーにおける言動について、レジリエンス要因を分類し数値化したところ、正の要因が右肩上がりにやや上昇傾向を示した。個人要因においても、プレイセラピーの後半になると多くの要因内容がカウントされるようになっていき、負の個人要因が減少傾向になった。

正の個人要因を平野 (2010) のレジリエンス要因に当てはめると「社会的外向性」「自己開示」「問題解決能力」「自立・自己制御」「楽観性」「道徳心・信仰心」が殆どの回でカウントされていることから、これらの要因が適応過程に影響を与えたと考えられた。また、「自立・自己制御」と「感情調節」が負の個人要因として殆どの回でカウントされたことから、今回の A 君の不適応にこれらの要因が影響したことが推測された。

正の対人的要因については、アクスラインの 8 原則における「子どもの表現した内容を受容している」「子どもが何も気にせず内的世界を表現できるよう自由な雰囲気を作る」「子どもの示した表現内容に関して主に感情に焦点化しつつ、反射することで子ども自身の気づきを促す」「子どもが主体となり進むべき、セラピストはこどもの後に従っていく」をセラピストは実行しようという姿勢が見られ、これらがカウントされた。しかし、「子どもが自分の表現や行動に責任を持つように働きかける」についてはカウントされなかった。

表 1. プレイセラピーの過程におけるレジリエンス要因カウント数

| 要因 | 1回 | 2回 | 17回 | 18回 | 19回 | 24回 | 29回 |
|---------|----|----|-----|-----|-----|-----|-----|
| 正の個人要因 | 52 | 23 | 43 | 35 | 42 | 39 | 51 |
| 正の対人的要因 | 20 | 10 | 19 | 14 | 21 | 16 | 24 |
| 正の物理的要因 | 9 | 9 | 9 | 9 | 10 | 9 | 9 |
| 負の個人要因 | 28 | 9 | 20 | 14 | 17 | 8 | 5 |
| 負の対人的要因 | 60 | 30 | 26 | 25 | 27 | 16 | 18 |
| 負の物理的要因 | 1 | 0 | 0 | 1 | 0 | 1 | 0 |

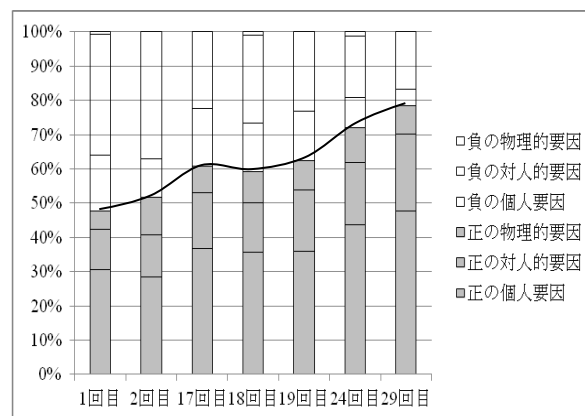


図 2. プレイセラピーの過程に伴うレジリエンス要因カウント数

4. まとめ

A 君の適応過程は、当初「自立・自己制御」「感情調節」が負の要因として大きく不適応方向に影響をうけ、プレイセラピーの過程とともに「自己開示」の能力が開発され、他の正の要因とともに適応状況の方向へ影響を与え、変化したと思われる。臨床心理実践におけるプレイセラピーの過程をレジリエンス要因の視点から分析することで、プレイセラピーの意義が端的に説明できることが明らかになった。また、適応過程に大きく影響するレジリエンス要因を捉える可能性も示された。さらに、セラピストの態度傾向を把握することにも役立つように考えられた。

主要参考文献

- [1] 小塩真司・中谷素之・金子一史・長峰伸治(2002). ネガティブな出来事からの立ち直りを導く心理的特性—精神的回復力尺度の作成—カウンセリング研究, 35(1), 57-65.
- [2] 小塩真司 (2012). 質問紙によるレジリエンスの測定—臨床精神医学, 41 (2), 151-156.
- [3] 平野真理 (2010). レジリエンスの資質的要因・獲得的要因の分類の試み—二次元レジリエンス要因尺度 (RBS) の作成—パーソナリティ研究, 19(2), 94-106.